
武装神姫 《BATTLE CHRONICLE》

月影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫『BATTLE CHRONICLE』

【Zコード】

N1195Z

【作者名】

月影

【あらすじ】

友との再会、神姫との出会い、学園での生活。そして、戦い

これは一人の少年とそのパートナーたる神姫、そして彼を取り巻く人々が織り成す、神姫と共に生きる町と呼ばれる場所で紡いぐ物語

ますが、ゲームの内容が内容なので細かいストーリーはほぼオリジナルです。話のネタが思いつき次第、執筆・投稿という形をとるので更新は不定期となります。また原作に出てくるキャラも何人か出てきますが、キャラの性格において、読者の皆さんとのイメージとの多少の相違が出てくるかもしれませんがご了承下さい

第一話『神姫と共に生きる町』（前書き）

この物語はフィクションです。団体、地域名は架空のものとなります。

第1話『神姫と共に生きる町』

西暦2036年。第三次世界大戦もなく、宇宙人の襲来も無かつた、現代から繋がる当たり前の未来。その世界ではロボットが当たり前の様に存在し、様々な世界で活躍していた。

神姫、それは全長15cmのフイギュアロボ、“心と感情”を持ち、最も人々の近くにいる存在。多彩な道具・機構に換装し、オーナーを補佐するパートナー。

その神姫に入々は思い思いの武装を装備させ戦わせた。名誉の為、強さの証明の為、あるいはただ勝利の為に

オーナーに従い、武装し戦いに赴く彼女らを人々は『武装神姫』と呼ぶ

まず目に飛び込んでくるのは神姫をつれて歩くたくさんの人々。神姫センターでは毎日の様に公式バトルが行われ、参加者と観客で大賑わいだ。更に魚屋を覗いてみれば猫型神姫のマオチャオが頭に捻り鉢巻を巻いて店主と一緒に店番をしていたり、公園で行われているストリートライブに耳を傾ければギター型神姫ベイビー・ラズがマスターと一緒にギターを弾き鳴らしている。学校では生徒と一緒に神姫が当たり前の様に授業に参加しており、それどころか勉強を教える教師の傍らにも教師を補佐するかの様に神姫が居る。その場所に一步足を踏み入れれば神姫を見かけない事など無い、と言うぐらいいこには至る処に神姫が存在している。何時しか人々はこの場所

をいつ呼んでいた“神姫と共に生きる町、**神姫市**”と

まだ雪が降り積もる12月、神姫市立神姫学院高等部。物語はここから始まる

第2話『再会と始まりは粉雪が降り積もる場所で』

少年は緊張の面持ちで待っていた。茶髪のミドルヘアーにほんの少しだけ鋭い目つきをした少年が厚めのフード付きのコートに身を包み、その手に一枚の紙を持ってじっとその時を待っている。少年だけではない、周りに自分と同じ様にその時を待つ少年少女で溢れ返っている。少年と同じ様に緊張の面持ちをした者も居れば、自分は大丈夫だと自信に満ちた者も居り、それとは逆に不安一杯のか目を強く瞑り手を組んで祈つてる者も居る。そんな中遂にその時はやってきた。係りの人が少年少女たちの前に立ててあるボードに一枚の大きな紙を貼り付ける。そこにはたくさんの番号が順番に書かれており、時より飛んでいる番号もある。皆が目を凝らして自分の番号を探し始め、やがてある者は歓喜に包まれ、またある者は落胆に沈む。

そしてこの少年も同じ様に数字を探す自分の番号は0124。が、0122の次に表示されていたのは0125。自分の数字は存在しない。けれど少年は他の人と同じ様に落胆には沈まない。逆に少しホッとする、何故ならこの用紙に自分の番号が載つていようものなら負けなのだ。やがて、係りの人が空いているスペースに一枚目の半分しかないサイズの用紙を張り出し、少年はそちらに目を向ける。そこには僅か10個の番号しか載つておらず、番号の並ぶ順番もバラバラだ

「0124、0124」

緊張の余り、口に出しながらその番号を探す少年、やがて

「……あつた」

上から5番目に表示されている124の番号、もつ一度見比べてみるが間違いない

「――っしー」

感極まった表情で思わずガツツポーズをした。自分は勝ったのだと、両親との勝負に、目的は達せられた。と、同時にホツとしたのか体から力が抜け思わずフウーッと息を吐いてしまった。

「よっしゃあ————！」

と、何処からとも無く響いてくる一際大きな歓声

「やつたぜ！ たま子、合格だ合格！！」

「流つ石、ご主人様、すごいのですう～」

「おうよ、俺様にかかるば楽勝楽勝！」

「楽勝なのですう～」

と、そこには自分のパートナーであるスマオチャオ型の神姫と共に喜びまくっている一人の少年。こちらは黒のツンツンヘアに人懐っこそうな目をしている。余りに騒ぎすぎなのか落第してしまった人達が恨めしそうな視線を向け始めるが、一人と一機はそれに気づかず「神妃学院、キタ━━━！」と未だバカみたい騒ぎまくっている。少年もそんな彼らの様子を啞然と眺めていたが、その視線に気づいたのか彼と目が合い、やがて自分の方に近づいてくる

「んんん～？」

「「」主人様？」

「え、えつと……俺が、何、か？」

自分の顔をジッと覗き込んでいる相手に少し引き気味になりながらも、訊ねるとやがて彼は少年から顔を離し

「もしかして……お前、拓哉か？」

「えつ？ まさか……甚平！」

ここは、神姫市の神姫センター。神姫センターとは公式バトルと呼ばれる小規模の大会に使われる会場を始め、神姫協会直営のオフィシャルショップやカスタムエンジニアと呼ばれる人々によつて改良されたバーツを取り扱うプレミアムショップ、その他にも談話スペースや軽飲食フロア等が存在している神姫と共に暮す人なら誰もが利用していると言つても過言では無い神姫関連全般の管理、運用を行う神姫協会が運営する大型施設だ

「いや～、懐かしいぜ。まさかあんな所で旧友と再会するなんてよ」

「まさかは俺の台詞だ。小学校を卒業した後、遠くの町に引っ越し

たつてあいつから聞いたけど、神妃市に住んでたんだな。更に同じ高校を受験してたなんて偶然ってのは恐ろしいな」

「この一人の少年。名は天音拓哉と大木戸甚平、小学校時代の幼馴染であつたこの二人も今は神妃高校から神姫センターに移動し、軽飲食フロアでハンバーガーを食べている

「この町に住んでるなら、いや、住んで無くても神姫のマスターやつてるなら高校の第一志望は殆ど神妃学院になるからなあ。と、紹介が遅れちまつたな。こいつはたま子、判つてるとは思うが俺の神姫さ。んで、こいつが天音拓哉、前に言つてた小学校時代の親友だ」

「たま子ですう、ふつつか者ではありますがあろしくお願ひしますですう」

そこで思い出した様に甚平がたま子と拓哉にそれぞれの紹介をするとたま子も自分自身の自己紹介を始める。言葉の単語を一つ間違えているが……

「ん、こちあらこちよろじへな

「で？」

拓哉も「一ラを一口飲んだ後に言葉を返すと、甚平が周りをキヨロキヨロと覗渡す

「で？ てのは？」

「とほけるなよ。拓哉も神妃学院受けたつて事は神姫やつてるんだろ？ どこに居るんだ？ お前の神姫は」

甚平が期待に満ちた表情で訊ねてきたが、拓哉それに「あ～」つと少し言いにくそうな反応を見せると

「スマン、神姫は居ないんだ。そもそもマスター登録すらしてない」

「はあっ!? マスターじゃないつてのに神妃学院を受験したって事か?」

先に甚平が言つたとおり、神妃学院はその独自の教育システムから神姫のマスターをやつている学生なら誰もが第一志望にする高校で、しかも同じ敷地内に経つ神妃学院大学部へのエスカレーター方式の学校だ。つまりそれだけ受験の競争率が高く、一般入試ならば低くても倍率10倍は堅く、一人が受けた推薦入試でも倍率4倍はある超難関校なのだ。そしてその独自の教育システムも神姫が居なければ意味を成さない。神姫が居なくとも授業は問題無く受けれるがマスターで無い人間ならば諦めて他の高校を受験するのが普通だ

「どちらかと言つと神妃学院を受けたのは神姫を始める為、更に言えば神妃市に住む為だつたんだ」

神姫は確かに日本全国で一大ブームを巻き起こしており、神姫のマスターになる為に日本にやつてきたと言う外国人も居る。けれど、拓哉の住んでいた町は例外の一つだった。

「俺の住んでる町つてものすごい田舎町でさ。神姫センターはあるが、協会公認のホビーショップすらないんだ」

神姫と言つるのは何処にでも売つてゐる訳では無い。協会直営の才

フィシャルショップか、協会の方で神姫を取り扱う事を許可された協会公認のホビーショップでしか見つからない。そして拓哉の住んでいる地域はそれがどちらも無かつた。つまり、日本の中でも数少ない神姫が盛んでない町、と言つことだつた

「でも、俺の親父は役場に勤めているから引っ越す訳にもいかない。かと言つて神姫の事も諦めたくない。だから」「

「神姫学院に入学して一人暮らしを、つて事か」

顎に手を当てながら拓哉の言葉に続く甚平。確かにその理由なら納得だ

「まあ、最初は親も反対したてたんだ。学費もそうだけど生活費仕送りの関係もあるし」

神姫と言つのはおもちゃと言つよりは既に小人に近い存在だ。とは言え、神姫がおもちゃである事に変わりは無い。拓哉の言つている事は「流行のおもちゃで遊びたいから一人暮らしをする」と言つてゐると同義。確かに親がそう簡単に許すはずも無い、ましてや神姫学院は大学へのエスカレーター式、子供のあおもちゃの為に7年分の学費と生活費を仕送る。余程、神姫好きな親で無い限りまず認めない

「話し合いの末、父さんは二つの条件を出してきた。一つは神姫学院への推薦入学、しかも第一種奨学金による学費の免除付きで合格する事。二つ目、神姫はあくまで自分の力で手に入れる事、この二つを飲むなら神姫市での一人暮らしを認める、つてね」

「第一種奨学金による学費免除つて、全受験者の中でも上位5名しか

受けれない制度じゃねえか……」

神妃学院には奨学金制度が設けられており第一種と二種に分かれている。一種が大学卒業後に返済しなければならないのに対し、第一種は返済不要の奨学金。けれど、これは誰もが受けれる制度ではない。第二種は一般合格者の上位5名と推薦合格者の上位10名が受けられ、その中でも更に推薦合格の上位5名に入った人間が第一種も選ぶ事が出来る

「で、どうだつたんだ結果の方は?」

「推薦合格第5位」

「も、ものすゞぐギリギリですう……」

「全くだ。中学の三年間、この条件の達成に全力を尽くしてきたつてのにそれでもギリギリだつたんだ……如何にこの学校が超難関校と呼ばれたか良く判つたよ」

我ながら良くながんばったな、と拓哉は少し遠い目をしていたがふと思いついた様に

「そういうや、甚平の方こそどうだつたんだよ? 合格者上位十名が載つていた用紙が張り出された後に大騒ぎしてた訳だし」

「俺か? 俺は確か……」

「"じ"主人様の番号は一番上に載つてたのです~」

「一番上、つて事は主席合格かよ……」

まあ、甚平なら納得出来なくも無い。この底抜けに明るい幼馴染、普段の見た目に反し、実は頭を使う事に関しては超が付く天才だ。俺と甚平、そして小早川千歳と言うもう一人の幼馴染の三人でよくテストの見せあっこをしていたが甚平は殆ど満点ばかり取つており、時より1・2問落とすもそれもうつかりミス、ちょいミスと言うレベルだ

「まあ、主席だろうが5位だろうが学費免除には変わりないんだし、よかつたじゃねえか。これで親の口をあかしてやれるつてもんだろ？」

「『主人様あ、それは違います。口を明かすじゃなくて、目を明かすですう』」

「おおつと、こりゃ一本取られちまつたな。アハハハハ」

「アハハハですう」

「鼻をあかす……な」

ホント、人は見かけによらないものだ

「うと、そうだ。すっかり忘れてた」

ポテトを食べていた甚平が突然、テーブルに備え付けられていた小型ディスプレイのスイッチを入れる。そこに映し出されたのは、廃墟。そしてそこでは一体の神姫、セイレーン型のエウクランテがバトルをしていた

「今日はエウクランテクイーン杯をやってるんだ。丁度、決勝戦みたいだな」

一人と一機はそのままディスプレイに釘付けになる。片方がエウクランテ型の純正武装、クローラのゼピュロスでラッシュをかけるのをもう片方が大剣で防いでいる。やがて、大剣を持った方がバックステップで距離をとったかと思うとそのままバーニアを使い急上昇。相手の方がクローラをデータ化し収納すると今度はビームランチャーボレアスを取り出し撃つも、それも避けられた。やがて、宙に居る方は相手の真上に来ると今度は大剣を振り上げ急降下。相手もそれを受けたが、ダブルナイフのエウロスをクロスさせて受け止めようとする

「……ダメだな」

拓哉がそう呟いた瞬間、落下してきた方が剣を振り下ろし、相手が受け止めるも防いだ方は防御を破られ地面に叩きつけられた。何とか立ち上がりうとするも、やがてそのまま地面に伏し、試合終了のブザーが鳴る

「唯でさえ重い一撃を持つた大剣、しかも降下の勢いと重力が乗せられた一撃だ。真っ向から防いだのはマスターの判断ミスだ」

「ほへ、じゃあ拓哉だつたらどうする?」

「そうだな……相手が振り下ろす直前を見極めて抜き胴で一撃当てから追撃、つて所だな」

「いやいや拓哉じゃねえんだから、そんな事は剣道素人じゃできねーつての」

そう、この言葉の通り、拓哉は中学時代剣道部に所属、段級位一級持ちで全国大会で優勝した事もある。特に剣道が好きという訳では無いが通っていた中学が剣道の強豪校で拓哉も部活での内申を稼ぐ為に所属し稽古に明け暮れていた

「それに多少は応用できるかもしれないけど、神姫バトルと剣道は違うからな。そこは覚えておいた方がいいぜ。と、大会も終わつた事だし今度はオフィシャルショップにでも行って見るか? 俺のねーちゃん、そこの店長なんだ」

そう言って、ディスプレイを消すと二人と一機は席を発ち、バーガーショップを後にした

オフィシャルショップ、神姫協会が直営する神姫専門店でありその品揃えもホビーショップよりずっといい。基本は神姫センターなどの神姫の関連施設にしかない店だ。

「姉ちゃん！」

「野乃姉、こんちわですう」

「甚平、たま子ちゃん、いらっしゃい。受験の方はどうだった？つて、あら、そちらの子は？」

そこで店員のHプロンをつけ、黒い腰まで伸ばしたロングヘアに優しそうな目に眼鏡を掛けた女性が棚の傍にしゃがみ込み、商品の在庫チェックを行つていたが甚平が声をかけると同時に立ち上がりながらこちらを振り向き、近づいてきた。大木戸野乃香、甚平の姉で拓哉達三人が遊ぶ時の保護者の位置に居た女性である

「受験はバツチリ！ それにより」

「お久しぶりです。野乃香さん」

「その声……もしかして拓哉君？ 懐かしいわねえ、元気にしてた？」

「ええ、お蔭様で」

「もつ、固いわよ拓哉君。昔みたいに野乃姉つて呼んでもいいのよ？」

「いや、流石にそれは……」

小学生ならいざ知らず、中学生（しかももつじめ高校生）」までなってその呼び方は流石に恥ずかしかった

「ふふ、冗談よ。そんな事より拓哉君はどうして此処に？」

「拓哉も神妃学院受けてたんだよ。そこで合格発表会場で出くわしたんだ」

「やうだつたの、それじゃ拓哉君も神姫をやつている訳ね」

「いえ、実は違うんです」

拓哉が自分の両親との約束の話を終えると野乃香さんは目を伏せたまま考え始めたまま考

「しかし、拓哉の両親も厳しいよな。神姫をやりたいなら学費免除で合格しうなんて厳しそうだろ。役場勤めなら金だつて困つてないだろ？」

「え？」

そこで野乃香さんはどこか悟った様な目で一人を見ながら口を開いた

「拓哉君の両親は意地悪やお金の関係でそんな条件を出したんじゃないと思うわ。神姫は確かにおもちゃよ。でも、彼女達にはちゃんと意思や感情がある。つまり神姫のマスターになるって事は動物を飼うのと同義。そこにはマスターとしての責任が生じるわ。拓哉君の神姫への情熱が確たるモノか両親はそれを試す為にそんな条件を出したんじゃないかしら？」

一人暮らしと言つモノがどれだけ大変か、それは大人である親が一番判つていたのだろう。一人暮らししがつらいからと神姫を捨てて親元戻るなんて事は褒められた者ではない。だからこそ、それだけの覚悟があるか試すための条件、そこまで考えてはおらずただ単にお金の都合だとかそんな理由で出したものだと思つていた二人は彼女の言葉に何も言えなくなつていた

「まあでも、拓哉君はその条件をしつかり果たしたんでしょう？ だったら胸を張つてお父さんとお母さんに報告しなさい。きっと今度は快く認めてくれるはずよ？」

「は……」

「さてと、となるとこれからは拓哉君もここのお得意様になる訳ね。知り合いよしみでサービスするわよ、気持ちだけ」

「気持ちだけよ！？」

姉の言葉に甚平がツツコミを入れ、場の空氣が明るくなつた所で店の自動ドアが開き一人の少女が入つてきた。眠たそう、と言うよりは憐れな目つきをし、背中まで伸びだ茶髪を一本のみつ編みにしてそれを肩から背中では無く前の方に下ろしている。厚手のコートに親指だけが分れた手袋、口元を隠すぐらのモコモコのマフラーを巻いている。

「……こんなにちわ

その少女は店内をきょろきょろ見渡し、こちらの姿を見つけると近づいてきて軽く会釈しながら静かに口を開いた

「遙ちゃん、いらっしゃい。今日も神姫を見に来たの？」

顔馴染みなのか、野乃香も親しげに声をかけると遙と呼ばれた少女は無言で頷いた。かと、思つと拓哉の姿を見て軽く首を傾げと、今度は甚平が

「天音拓哉つて書いて俺の小学時代の親友だよ。拓哉、いらっしゃ

」

「志筑遙、よみこべ……」

「あ……うふ。よみこべ、な

物静かだが愛想は悪くないじへ、薄く笑みを浮かべながら簡単に血口紹介を済ませると遙はそのまま神姫素体の並ぶ棚に歩いていった

つた

「あの子もこの街の子なんだけど、拓哉君と同じで自分の神姫が居ないの。どうやら家の都合じけてね。でも、よほど神姫が好きみたいでいつもよく此処にきては神姫を眺めてくるのよ

「やうなんですか」

「と、やうだわ。甚平、せつかく来たんだしたま子の定期チェックしてこく。」

「やうだな、やうじやお願いするわ

「お願こするわ、ですう

甚平からたま子を預かると野乃香は店の方に引っ込んだ

「たま子、どこか悪いのか？」

「そんな訳じゃない。自分の大事な相棒なんだ、体調に気を使うのもマスターの勤めつてもんだろ？人間で言う、健康診断みたいなもんさ。さて、俺はちょっと武装の方を覗いてくるから拓哉も好きに見て回ってくれ」

そういう残し、甚平もその場を離れていった。拓哉は手持ち無沙汰にしていたが、やがて遙の隣に立つと

「毎日、此処に来ているんだって？」

「うん……」

「そつか……俺は此処に来るの、つてか神姫を生で見る事自体、初めてなんだ」

「…………」

「ああ、俺の住んでるとこ、神姫が全然盛んじゃなくてな。俺もまだ持つてないんだ、自分の神姫」

すると、遙は少し表情を険しくすると

「神姫はモノじゃない……だから、持つてないなんて言い方は、違う……」

「そ、う、だつたな。スマン……」

「……うん」

拓哉の謝罪に満足げに頷くと遥は、再び神姫に目を戻し、拓哉も同じ様に神姫を見つめる。箱の透明なビニール部分から姿を覗かせる神姫はこれだけを見ればただの人形にしか見えないが、バトルをしたり、様々な所で笑つたり、怒つたりと人と同じ様に動いている姿を見た一人には、目の前の神姫達はまるで眠っている様に見えた。まだ見ぬ、自分のマスターとの出会いを心待ちにしながら

「それじゃ、俺は帰るよ。帰つて必要書類も書かないといけないし

「……それじゃ」

「おう、そんじゃまたな。つと、その前に拓哉、携帯もつてるか?
せつかくだし番号とアドレス交換しこうぜ」

「あ……わたしも、いい?」

「当然!」

あれから、三人は夕方までオフィシャルショッピングで神姫を見たり野乃香さんとお話をしたりしてもう既に夕方になっていた。拓哉はそろそろ帰宅するべく、駅に向かい甚平と遥の二人はそのお見送り

にきていた。そんな時、甚平がそんな提案をしたので三人はそれぞれ携帯を取り出すが

「甚平、お前の携帯って少し変わった形だな。ビニのメーカーだそれ？」

一人が普通の携帯なのに対し、陣平の携帯は横の一つの辺の長さが同じでない縦に引き伸ばした六角形の様な形をしており、ボタンの付いている方が白く、ディスプレイの方は緑色をしている。拓哉が尋ねると甚平は待っていましたとばかりに

「ふつふつふつ。良くぞ聞いてくれた！ 何を隠そう、これはなんと

「

「バトルフォン、神姫マスターが持つ携帯で、神姫マスターの証……」

「は、遙ちゃん、俺の台詞取らないでくれる……」

まるで水戸黄門の印籠の様に携帯バトルフォンを拓哉の前に突き出しながら甚平の言葉を遮り、遙が手短に説明すると甚平はそのまま、田を遙の方に向けるも遙はその視線を無視して拓哉と番号を交換する

「……甚平も」

「お、おつ……」

「神姫のマスターはみんなこれを持っているのか？」

「うー、たぶん全員つて訳じゃないと思おうぜ。機種変メンンドイとかつて理由で従来のICOカード型のままの奴もいるし。ただ、バルフォンには神姫マスターにとつて便利なアプリが勢ぞろいだし、これから神姫を始めるなら断然こっちにした方がいいと思うぜ」

「なるほど、覚えとくよ。さて……そんじゃ改めて、またな二人とも」

「おうー。」

「……また」

拓哉が軽く手を挙げて言つと、甚平は大きく、遙は小さく手を振つて応え、拓哉は駅の中に戻つていった

「ふう……」

そしてその日の晩、拓哉は必要な書類の準備を終えてベッドの上に倒れこんだ。あの後、親に事の次第を告げると、最初は驚いていたが野乃香の言うとおり今までの事がウソの様に両親は自分の一人暮らしを認め、明日からは家事や料理の特訓を始めるそうだ。後は明日書類を投函すれば全て完了、これからは高校にあがるまでの数ヶ月は遊んで過ごせる。とは言え、今の時期はまだまだ受験シーズ

ン真っ盛り。それから一足先に解放された拓哉は残りの中学生生活何して過ごすか考えていると突然、携帯に着信が入った。差出人は甚平からだ、内容は

『よう！ 新年の予定つてもう決まってるか？ 決まってねえなら3日と4日に神姫タワーで新春神姫祭りがあるんだけど遥ちゃんも誘つて一緒にいかねえか？』

と言つ内容だった

「3日から、か……」

拓哉はカレンダーに目を向ける。3日なら祖父母とかの知り合いの家めぐりも終わってるしお年玉もあるから祭りの軍資金も十分。丈夫そうだと判断すると拓哉は了承の返事を返し、携帯を置いた。このなんて事無い約束が拓哉にとって大きな出来事になるとは、まだ知らずに

第4話『最高のお年月』（前書き）

神姫の発売順や、原作キャラのパートナー・神姫は物語の都合上、変更する事がありますがご了承ください。また、神姫の武装に関してはそれの神姫の専用武装は名前で、汎用武装は武器の種類で記述します

第4話『最高のお年玉』

神姫タワー、大規模な神姫関係のイベントや大会の会場となる施設で、巨大な高層ビルとその近くに小さいながらもドームが建てられ、更には遠くからやってきた来客や大会の出場選手為の宿泊施設も完備、敷地内の広場は大きな公園となつており、人々の憩いの場とされている神姫センター以上に大きな施設である。当然、今回の新春神姫祭りもここで開催される。何時もは穏やかな雰囲気に包まれた公園も今は沢山の出店が立ち並び、別のスペースではコンサート等のイベントが行なわれている

「すっげー……」

「わあ……」

そんな活気溢れた様子を目の当たりにし感嘆の声を上げる拓哉と遙。なんで会場に入らないのかと言うとまだ甚平が来ていないから。本人の名誉の為に言えば決して甚平が遅刻している訳では無く、ただ単に今日の事が楽しみで一人とも早く着いてしまっただけだ

「(う)じゃ毎年こんなお祭りが行われているのか」

「他にも夏やクリスマスにも同じ様にお祭りをやっているの……。でも、実際に来たのは今日が始めて」

「そつなのか?」

「家の都合で……行けなかつたから」

「おつと……」

「…つ」

拓哉の言葉に遙は無言に頷いた後に答えると時計に手をやる、待ち合わせの時間まで後10分チョイだ

。そして時計から目を離した時、後ろから近づいてきた男性が遙にぶつかった。手には大小のダンボールが積まれ、その所為で遙に気づかなかつたのだろう。ぶつかった拍子に一番上に積まれた小さな箱が二つ零れ落ちたが、地面に落ちる前に拓哉と遙がそれをキャッチした

「済まない。荷物が多くて前が良く見えなかつたものだからね」

「……大丈夫です」

「どうぞ、落ちそうになりましたよ」

男性の謝罪に一人が大丈夫だと答え、それぞれがキャッチした箱を男性に返す。男性の姿は白の作業服に身を包み、服と同じ色の帽子を深く被っている。

「ありがとう。ところで君達は会場に入らないのかな?」

「はい、友達と待ち合わせしているんで」

「なるほど」

男性は荷物を一度下に置いていくと一人の顔を見渡し、やがてポケットから一枚の細長い紙切れを取り出し一人に差し出した

「これは同僚から貰つたものなのだが私には必要ないからね。君達にプレゼントしよう」

その紙切れには『開運神姫くじ抽選券控え』とかかれ、4桁の番号が書かれている。よく見ると端っこの方は切れ目にそつて切れた跡があるが、恐らく抽選に使う半券部分が付いていたのだろう

「……いいんですか？」

「なに、さつきぶつかつてしまつたお詫びと大事な荷物を守つてくれた御礼だ。遠慮なく受け取つてくれたまえ」

一人はお互に顔を見合せた後に男性に頭を下げ、彼も満足げに頷くと「では、仕事があるので失礼するよ」と言い残し、再びダンボールを持って会場に入つていった

「今の人、F社の人か？」
フロントライン

「たぶんそう……服の背^{ハコ}にマークが入つてゐる

「よつ、二人ともあつけおめ～」

「「」とようですう～」

その入れ違いに甚平とたま子が姿を現した。

「……おめでと」

「ああ、今年もよろしくな」

「しつかしー一人とも早いな、まさかとは思つけど俺が遅刻したつてオチは無いよな……？」

「人が余りに早く来ていたもんだからもしゃ自分が時間を間違つたんじやと思い時計に目をやりながら訊ねると

「……正解」

「マジっー！？」

「……ウソ、冗談」

「な、なんだ冗談か……」

甚平が驚くと同時に遙が笑みを浮かべてすぐにジョークだと明かすと一気に脱力した

「あははは、さて、全員揃つた事だしそろそろ俺達も行くか

「うん……」

「だな。ところで一人の持つてるそれつてもしかして神姫くじの抽選券？」

「さつきF社の従業員とぶつかつてな、そのお詫びだそうだ

「マジかよー？ うわー失敗した。俺も早く来てりや良かつたぜ」

そこでようやく一人の持つてる抽選券に気づき、一人はそれぞれ

バツクと財布の中に券を仕舞いながら拓哉が説明すると甚平がつくりどうな垂れる。が、すぐに元に戻り

「まあ、後で神姫ポイントで買えば良いだけか

神姫ポイントは神姫関係の買い物に使う事の出来るポイントの事だ。武装や神姫の素体は現金で買うとしたらかなりの値が張る。特に素体に至っては最新型のPCに迫る値段をしている。そして神姫ポイントは普通の神姫バトルのファイトマネー、今回の神姫くじの様な神姫関係のイベントの賞品、公式バトルを始めとした各種大会で好成績を残す事で溜まっていく。裏を返せばこの神姫ポイントはマスターにならなければ殆ど溜める事が出来ない為、一体目の神姫はみんな大体は現金で買い、以後は神姫ポイントで購入するのが普通だ

「抽選会は……午後から見たいだな。午前は新春バトル大会アマチュアの部があつて、プロの部は明日か」

「……アマチュア？」

「プロとかつて、何の事だ？」

三人が受付の人から貰つたパンフレットを確認している中、遙が甚平の言つたアマチュアという言葉について訊ね、拓哉も気になつたらしく同じ様に甚平に目を向ける

「ああ、そういうや一人は知らないんだよな？ 神姫のマスターは大きく分けてアマチュアマスターとプロマスターに区別されるんだ。神姫協会の認定試験を受けて合格した人がプロマスターになれてFバトルとか言つた全国規模の大会に参加出来るつて仕組みさ。プロ

マスターの大会ともなるとポイントだけじゃなくポンツの賞金も出るから、プロマスターになつてそれで食つてる奴もいるんだぜ」

「最早、ただの遊びの域を超えてるな……」

「その通り、神姫バトルは既に遊びじゃなくて一種のスポーツと呼んでも可笑しくないんだ。まあ、長い説明はこのくらいにして折角だし俺もこの大会、出てみるか。丁度この間新しい武装を買った所だしな」

「へえ、なにを買つたんだ?」

「新しいアックスですう。これで相手を大・粉・さーい！ ですう」

それから、大会の受付が始まるまで三人は出店を見て回っていた。普通のお祭りと違うのは神姫のお祭りだけあって、食べ物だけでなく正月限定の武装を売ってる出店もあり、くじや射的の賞品も殆どが神姫グッズや武装関係となっている。その内大会の時間となり三人は神姫タワーのドームに入り、甚平は参加申し込み、二人は観客席に移動している。大会はまずAからFまでの幾つかのブロックに別れ予選トーナメントが行なわれ、各ブロックの優勝者6人が総当たり戦で総合優勝を決める、と言うルールの様だ

『 いまだたま子！ 一気に突つ込むぞ！』

「にやーー！」

そして、総当たり戦。甚平は4勝1敗で最後の戦いを迎えていた。相手は姉妹機として存在している戦乙女型神姫の妹機アルトアイヌだ。マスターはプラチナブロンズのロングヘアをした少女で年齢的には自分達より1つ2つ年上と言った雰囲気だ。他の人と違い、高級そうな衣服に身を包んでいる事から何処かのお嬢様を思わせる。そして相手の戦績も4勝1敗で事実上、これで優勝が決まる。相手の多弾頭ミサイルと機関銃の銃撃を掻い潜り、腕の装甲と一体化したナックル、裂拳甲で殴りかかる。相手の方も大慌てで赤い大剣ジークムントを取り出し迎撃に入るも、大振りの大剣では間に合わず、たま子のパンチをモロに受ける

「にやつ、にやつ、にやーーつ！」

その後もジャブやストレートと言ったラッシュが入り、最後に上段の後ろ回し蹴りが入る。たま子の戦闘スタイルは完全近接高機動戦闘だ。武器は小ぶりと大振の武器が一つずつだけの軽量装備で相手の攻撃を掻い潜り接近戦で一気に決めると言うモノだ。バーチャルバトルなのに武装の重さなんて関係あるのかと思うかもしがそれはまた後程。とにかく甚平とたま子はそれのみを徹底的に磨き上げてる為、射撃戦闘や間合いを取られた場合はダメダメだが、一度相手の懷に潜り込めば無類の強さを發揮する。そして

「『『』』れで、フィニッシュ！（ですうーつー）』」

「うわあつ！」『きやあー！』

拳で相手がひるんだ所を新しく買った斧をフルスイング。アイヌは大きく吹っ飛ばされ、アイネスとそのマスターの少女が悲鳴を

上げ、地面に落ち動かなくなり試合終了のブザーが響く

「ハハしゃあっ！ やつたぜたまよー。」

「やつたのですうー。」

ライドオンシステムの際に使うバイザーを取り外し、バトルに使う筐体から出てきたたま子を自分の手の上に乗せてハイタッチをする。やがて反対側に居た少女もバイザーを外しう、と息を吐くと同時にアイネスも筐体から出てきてマスターの手の上に乗る。

「くやしーーー！ あんな奴、僕の普段の装備を使ってたら楽勝だつたのにーーー！」

「あらあらー、そんな事を言つてはいけませんよ。それにーー、接近戦でしたら普段のルナリエちゃんでも勝負は判りませんでしたわ」

自分の手の上で地団駄を踏んでいるアイネスことルナリエをおつりとした口調で慰めている。やがて甚平の方に近づいてくると

「まいりましたわー。とてもお強いんですね」

「へへへ、まあ接近戦ならそういう簡単には負けない自信があるんですね？」

「ふふふ、といひで見た感じ中3の方みたいですが高校はびひつ

「えつ？ えつと、神妃学院高等部に通つ事になつてますけど」

「そりなんですか。でしたら、またお会いする事になるかもしれませんわね。兎に角、優勝おめでとうござります。ではわたくしは」の邊で、失礼しますね」

と、そう言い残してステージから降りていく少女。それと入れ違うに司会進行の人が近づいてきて

「優勝おめでとうござります！ さて、今年の神姫祭りはF社が中心となって開催されている為、今回の優勝賞品もF社からの贈呈となります。が準備の方がまだ出来ていないらしいので準備が出来るまでしばらくお待ちください。丁度、神姫くじが終わる頃に贈呈できるとの事ですので。では、今回優勝した、大木戸甚平君とたま子にもう一度盛大な拍手を――。」

観客席から湧き上がる拍手の雨に甚平とたま子は大きく手を振り応え、大会は幕を閉じた

「お疲れ、優勝するなんてすばらしいじゃないか」

「……おめでとう」

午後の神姫くじの準備の為、来客者はドームから一旦出る事になり、拓哉達と合流した甚平は一人から労いの言葉を受けていた

「サンキュー。ただ……」

「ただ?」

「最後の対戦相手、なんて言うかまるで今回は手加減して戦つているかの様な言い方だつたんだよな」

最後のバトルの後、ルナリエの言つていた言葉。それがホントならば今回の戦いでは彼女達は本来の武装、つまり本気で戦つてはいなかつた事を意味する

「そこ」が、どうも引っかかるんだよな。それに、神妃校ならまた会う事になるかもとか言つてたし

甚平の疑問に拓哉も腕を組んで考え込むが答えは見えない。やがて
「また、会えた時に……訊いたらいいと思つ」

頭を悩ましている一人に対し、遙がそつ答えると確かにそうだと、
一人も考えるのをやめて

「それもそつか……うつし! 悩むのは此処までにしてまた祭りめ
ぐりでもするか!」

甚平の言葉に一人も頷くと三人は再び人ごみの中に混じつていつ
たのだった

それから、神姫のコスプレをした女性達のコンサートが公園内の特設ステージで行われているのを昼食を食べながら観賞したり、途中、武装ではなく神姫サイズの服を取り扱っている出店でたま子に着物を購入し着せたりとお祭りを満喫した三人。昼を過ぎ夕方に近づき始めても祭りの盛り上がりは弱まらず、むしろ仕事を終えてからやつてきた人々で更なる賑わいを見せている。そんな中

「さあ！ 来客の皆さんお待ちかね。午後の部の田玉イベント、開運神姫くじの抽選会を始めたいと思いまーす！」

ドーム内にあつた筐体は全て片付けられ、代わりに白いクロスが敷かれた。一段になつていて横長のテーブルの上に色々な景品が置かれ、その前には円柱状の機械。透明なプラスチックの中には機械によつて風が吹いているのか。抽選に使われる半券が不規則に舞つていた

「今年一年の運試しとも言えるこの企画！ 今年の賞品はF・L・社の方で神姫グッズから限定武装まで各種取り揃えてもらつております！ そしてー！ 今回抽選券を引いてもらうのはF・L・社の社長。西園寺信英さんにお願いしてもらいまーす！」

司会がそう言つてステージ脇に手を向けるとそこからステージに身を包んだ男性が観客に手を振りながら姿を現した

「あの人！」

「会場でぶつかつた……」

あの時は帽子被っていた為、表情までは判らなかつたが紛れも無く一人があの時ぶつかつた男性だつた

「皆さん、こんにちは。ただ今紹介に預かつたF社社長、西園寺信英です。今回は僭越ながら神姫くじの抽選を行う事になりました。加えて、抽選の後には我が社から重大な発表もあり、この場を借りてそれを行わせてもらおうと思います。では、この新年を祝うめでたい良き日、皆さんに幸運の天使が微笑む事の祈っています」

「幸運の女神じゃなくて天使、か。流石F社の社長つて所か」

「ん？ F社である事と何が関係あるんだそれ？」

「F社は……天使型神姫、アーンヴァルを開発した会社」

「なるほど、それで天使な訳か」

と、拓哉が納得した所で、信英が抽選機のゴム状になつてている所に手を入れ、ランダムに半券を掴んでは係りの人に渡していく。やがて一等から五等まで全部出揃い、抽選結果が五等賞から告げられていく。神姫の形をしたストラップや大量の神姫ポイント、リペイントと呼ばれる色違の武装等様々な商品が当選者に手渡されていき、残りは一等賞の発表のみとなつたがその段階でステージ上にあつた景品は全て無くなつてゐる

「さて、残るは一等賞のみとなりましたがこちらの賞品も只今準備を進めており、もうすぐ整うと思いますので先に番号の発表をさせてもらいます。では」

信英は言葉を切り、咳払いをした後にその言葉を告げる

「神姫くじ一等当選番号、2257番ー」

信英がその言葉を告げた瞬間、遙は目を見開き、突然その場に立ち上がった

「遙？」

「おーっ、まさかー？」

遙が言葉が無いのか無言のまま一人に券を見せる。間違いなく一等の当選番号だ

「おまつー、わざわざ見せんでいいから早く行けって。待たせすぎると無効になっちまつー。」

「落ち着け甚平！ そんなあせらんでも大丈夫だ。遙、とりあえず先にステージに行つてくれ」

「ま、マスター！ 落ち着くですう！」

甚平が若干取り乱したのを拓哉とたま子がなだめ、遙は小走りで観客席から駆け下り、ステージに上がる頃には少し息切れをしていた

「おや？ 君はあの時の少女だね。そつか、私のあげた券が一等賞だつたといつ事か」

信英の言葉に無言で頷く遙。そんな彼女の様子を優しい目で見ていた信英だったが一度目を伏せ、改めて観客席に目を向けると

「では、一等の当選者が決まつた所でもう一人。午前の部の新春神姫バトル大会アマチュアの部優勝者、大木戸甚平君！もし、居るのならば君もステージへ」

「へつ？ お、俺！？」

「何が何だか分からないと言つた状態だが、甚平もとりあえずステージの方へ上がる

「さて神姫くじどバトル大会の景品の贈呈をここで行いたい所ですが、その前に我が社からの重大発表に移らせて貰いたい」

同時にステージの後ろの垂れ幕にスクリーンが映し出される。そこには一体の神姫がフル装備でポーズを取つている画面が映つていて。そしてその後にプロモーションとして一機の神姫がバトルを繰り広げるアニメが流れる

「こちらは我が社を代表する二大神姫であるアーンヴァルとストラーフの後継機、FLO16・アーンヴァルMK2とFLO17・ストラーフMK2です。初期の二体が他社が次々に生み出している最新鋭の神姫達に対抗するのには限界がありました。故に今回この二機の開発に着手、つい先日プロトタイプの完成に至りました。無論、神姫の強さは神姫の新旧が全てではありません。現F1クラスのチヤンピオン、竹姫葉月さんも初期のアーンヴァル型で並み居る強豪達をなぎ払いチャンプの座を不動のモノとしているのですから」

すると今度はステージ脇から係員に運ばれてクリアケースに入れられた二体の神姫が姿を現した。ケース内の突起や段差に支えられる形で立つてはいるがまだ起動はしておらずその目は閉じられている。

装甲は純正武装のフルアーマーズで、アーンヴァルは大剣を、ストラーフはハンドガンを手にしている。しかし

「そしてこちらが今回開発された神姫のプロトタイプ。標準のカラーリングでも良かったのですが、この新年の祝う日にただそれだけではあまりに芸が無い。故に今回この一機はプロトタイプでありながら同時にリペイントタイプとして開発しました。正式名称は『F-016/T-アーンヴァルMK2・テンペスタとF-LO17/ストラーフMK2・ラヴィーナ』

今までのアーンヴァルが薄い金髪で白が基調だったのに対し、テンペスタは薄い紫に黒を基調としており、それとは逆に水色の髪に黒がメインだったストラーフは完全な黒髪に白を基調とした色合いをしている。

「さて、今回ステージに上がってきたら大木戸甚平君と……」

「……志筑、遙です」

信英は遙の名前をまだ聞いていなかつた事を思い出し、彼女に目を向けると遙も察したらしく自己紹介をすると

「志筑遙君だね。では一人にはこの神姫のマスター、即ちマスターになつてもらいたい。それが今回のそれぞれの景品だ」

「ええっ！？」

「この子達の……マスターに？」

突然の申し出にギャラリーは騒然、『いいなあ』だの『数字が

「一個違ひだつた」とか声が聞こえ、甚平は仰天、遙もポカーンとした表情で一体の神姫を見つめている

「無論、強制と言つわけでは無い。最終的な意思決定は……やります」遙君？

「EJの子達のマスター……やらせて下さー」

最初はポカーンとしていたが、やがて遙はその目に強い意志を宿して静かながらにハツキリと告げた。それもそうだ、遙は家の都合で神姫を迎えられずに居た。そんな時に巡つて来たこの機会、断るなんて選択は彼女には無かつた

「中々決断力のある子だね。判つた、なら君にはラヴィーナのマスターをお願いしよう。さて、後は甚平君だが君はどうするかな？遙君がラヴィーナのマスターになる以上、君にはテンペスタのマスターになつてもらいたい訳だが」

遙の決断に満足そうに頷くと今度は甚平に声をかける。が、甚平は神姫をジッとみつめたまま黙つている。普段なら「マジッ！？」やります！ 是非やらせてください！」と大はしゃぎしそうな彼が無言のままで居る事に遙が首を傾げると

「一つ聞きたいんですけど、この一機のテスターって、腕のいいマスターじゃなきゃいけないって事はないんですね？ でなきや、マスターで無い奴が当選しても可笑しくない、ってか現に当選したこの神姫ぐじの景品にする筈ないですし」

「ん？ まあ、そうだね。テスターなのだからデータ収集の他に神姫の能力上の欠点とかを探す目的もあるしね。勿論テストが終わっ

た後もマスターは続けてもらつつもりだからこの子達を大事にしてくれるマスターなら誰でも問題は無いが」

下手に凄腕のマスターにテスターを頼んだらその手腕で欠点を補つてしまふ可能性がある。そういう意味ではテスターには初心者かそこそこの腕のマスターをと言つのは間違いではない。やがて、甚平は決意した様に頷くと

「ちよつと待つて下さい」

そう言つて観客席に戻ると

「おい、拓哉。ちよつと来い！」

「ちよつ、いきなりビーフしたんだ？」

「いいから来い！」

観客席でポップコーンを食べていた拓哉の手を引き、ステージに戻ってきた

「君は、あの時遙君と一緒に居た少年だね」

「俺の親友で天音拓哉つて言つんです。信英さん、テンペスタのマスターなんですが俺じゃなくてこいつに任せてもうえませんか？」

「甚平！？」

「まひ？」

拓哉もさつきの遙同様に真っ先に同意するものだと思つていた為、
親友の予想外の提案に拓哉は驚きの声を上げた

「遙ちゃんもですけど、この一人は神姫が好きだつて気持ちはもの
すく強く強いんです」

遙は家の都合で神姫のマスターになれずとも毎日の様にオフィシ
ヤルシヨップを訪れては神姫達を眺めていたし、自分と会つた時は
たま子と本当に楽しそうに話していた。拓哉に至つては言わずとも、
神姫のマスターになりたい、その一心で超難関校の神姫学院を推薦
上位で合格してみせた。一人の神姫への想い、それがどれだけのも
のか甚平は痛いほどに判つていた

「さつとこいつならす」に良いマスターになつてくれると思つんで、
お願ひします！」

「ふむ……」

しばらく信英は拓哉の事をジッと見つめ、やがて

「天音拓哉君、だつたかな？」

「は、はい」

「神姫は好きかね」

「……はい！」

拓哉が遙と同じ様にハツキリと頷くと、信英は口元に笑みを浮か
べたまま目を伏せ

「良い返事だ……よし判つた！ 甚平君の頼み通り、拓哉君さえよければテンペスタは君に任せよつ。どうする？」

拓哉はクリアケースの中で目を閉じて いるテンペスタに目を向 けた。天使と い うよりは 境天使と呼んだ方 がしつくりくる黒い神姫。やがて、信英の方に目を向ける頃には彼の返事は決まつていた

第5話『よつひん、武装神姫の世界へ』

思いもよらぬ所から神姫のマスターとなる事になつた拓哉と遙の二人。二人は今、甚平を連れて神姫タワーのスタッフルームの一室に居る。ここでテンペスターとラヴィーナの起動及び、マスター登録を済ませる事になつてゐる。

「ところで甚平」

「ん、どうかしたか?」

「一体の神姫の到着を待つてゐる三人。そんな時、拓哉が不意に甚平に声をかけた

「その……ホントに良かつたのか? 折角の機会なのに俺に譲つたりして」

拓哉の言う折角の機会と言つのは新しい神姫のマスターになれる、と言う意味だけではない。全員とは言わずとも多くのマスターはある憧れを抱く。それは“この世に一つと無い自分だけの神姫”だ。けれど、そうした神姫のマスターになれるチャンスはあつたとしてもそれを掴み取れる事はそうそう無い。こうしたイベントでの抽選や大きな大会での景品としてリペイントタイプの神姫を、と言つのがごく一般的だが、それだって抽選は何百何千の分の1と当選の可能性は非常に低いし、大きな大会ならば優勝するだけの実力がいる。だからこそマスター達は神姫の性能や、性格などの心の有り様を決めるCSSCの組み合わせを変えたり、独自の武装アセンブルを考え、少しでも他の同型神姫との差異をつけようとする

「特に今回の神姫はリペイントである以上にプロトタイプでもある。それが何を意味するかは甚平も判つてゐる筈だ」

更に言えば今回の場合はリペイントだけでなくプロトタイプと言つのも関係している。プロトタイプと言つ事は起動テストを経て、製品化に向けてのプログラムの改善や調整が行われる。つまり今回の2機は悪い意味も含めて外見も中身も違う、ホントの意味でのこの世で一機しか存在しない神姫となる。拓哉の問い合わせに甚平は腕を組んで

「まあ、ぶつっちゃけ言わせて貰えどもすこおーく、惜しくは有るけどよ。俺にはもうたま子が居るし、それに同じ様なチャンスは何時かまた来るだらうしな」

そう言つて大会で疲れたのかパワーセーブモード、即ちお昼ね状態のたま子に目をやる。掴み取れる可能性は少なくともチャンスそのものが少ない訳では無い。神姫が盛んである限り、FL社を始めた各企業は新型の開発に力を入れていくだらう。そもそも新型のテスターをイベントの賞品にすると言つケースは過去にも良くある事だった

「だからさ、これで親友が晴れて神姫マスターの仲間入りする事が出来るなら今回は潔く譲る事にするよ。あつ、でもお礼はしつかりしてもううぜ、そこは譲れねえからな？ とりあえずは神姫祭りの最中は全部拓哉の奢りつて事で！」

「判つたよ。全く…… そう言つ所はホント抜かり無いな、お前つて

途中まではすぐ友達思いの良い事を言つていたが最後の最後でちやつかりしてゐる。人差し指と親指で輪を作りながらギブアンド

テイクを持ち出す基平に拓哉も苦笑を浮かべながら言葉を返すと「ヤリイツ！」と基平は指を鳴らす。ちなみに遙はを言つと楽しみで仕方ないのか、さつきから片時もドアから田を離さず自分のパートナーの到着を心待ちにしている

「済まない、待たせたかな？」

その時、ドアが開き、スタッフの人と信英が入ってきた。その手には一人にとつて見覚えのある箱を持っている。そう、ぶつかつた時に地面に落としそうになり一人がキャッチした箱だった

「もしかしてそれの中身があの一体？」

「その通り。そういう意味ではこの一体のマスターに君達が選ばれたのはどこか運命じみたモノを感じずにはいられないな」

神姫の入った箱を一人の前に置かれ一人が蓋を開けるとそこにはさつきと違い、武装と素体が別々にしまわれている神姫とクレイドル、武装に関する説明書。そしてCSCが入っている

「それとこれは私個人の方から。新たなマスター誕生のお祝いの品みたいなものだ」

「……バトルフォン」

そう言つて信英が差し出したものは一つのバトルフォン。ヘッド部分のカバーカラーはそれぞれ黒と薄い紫色、どうやら一体のヘアカラーに合わせているらしい。一人は、お礼を言いながらがそれを受け取る

「とは言え、機種変更はまだだからそつちの方は後でオフィシャルショッピングか、携帯専門店で各自済ませておいてくれたまえ」

そして、いよいよ一人は神姫の起動準備に取り掛かる、普通は CSCの組み合わせを考える事から始めるのだが今回はテストと言つ事で基本性格設定で起動する事になった。CSCをセットし終え、神姫をパソコンとつなげたクレイドルにセットする。クレイドルと言うのはパソコンを通じ神姫の充電を行う装置の事だが、形状が背もたれが少し鈍角に傾いた手すり付きの長椅子の形をしている為、充電器と言つよりはベットに近い印象を受ける。後はパソコンの方で起動プログラムを立ち上げ、初期充電の完了を待つだけだ

「さてと… それじゃあ待つてる間に俺の方からバトルフォンの機能についてレクチャーすつか」

「……よろしくお願ひします」

「うむ。それじゃ、一人の奴は機種変手手続きをしないと使えないから俺のを使って説明するぞ」

そう言つて基平は自分のバトルフォンを取り出して開く

「改めて、これがバトルフォン。自分がマスターを勤める神姫、所持している神姫ポイントと登録した所持武装やアセンブルのエディット。プロマスターになればFバトルにおけるランクと順位と言つた、マスターに関する基本情報は全てこれに記録されているんだ」

「……エディット?」

「自分の神姫やポイントはともかく所持武装の一覧、ましてや武装

の組み合わせまで記録しているのか？」

「ああ、リアルファイトならあまり関係ないけど、ライドオンバトルやバー・チャルバトルをする時にはこれが重要になってくる。まあ、それは実際にバトルをする時に説明するとして話を続けるぜ。他にも神姫ポイントで支払いを行う際はこれが財布代わりになる、つてのは一人ももう判つてるよな？」

甚平は神姫ポイントで買い物をする際にはバトルフォンをお財布携帯の様に使つていていた事からそれは予想できた為、普通に頷いた
「と、まあここまで従来のICカード型と同じで、バトルフォンのすごさは此処からだ」

そう言つて、甚平は更にバトルフォンを弄るとディスプレイにはまるでレーダーの様な画面が表示され、その真ん中近くに緑色の点が点滅している

「バトルフォンにはGPSを利用して登録した神姫の位置を示すレーダー機能や、離れた場所での神姫との通信機能が搭載されているんだ。特に通信機能に関してはマスターの基本情報とは別の通信用の登録を行えば他のマスターの神姫とも通信が出来る。これで万一、神姫とはぐれても通信やレーダー機能ですぐに位置を把握しやすくなるつて訳だな。バトルフォン発売前に生産された神姫はバトルフォン未対応で、その場合は専門の業者に持つていてバトルフォンに対応出来る様にカスタムしてもらう必要があるけど……まあ一人の場合は関係ないな。新型なら当然バトルフォン対応だろ？」

と、そこでパソコンの方から電子音が聞こえた。どうやら、起動準備が完了したらしい

「おっ、丁度準備の方が整つたみたいだな。そんじゃまあ待ちかねの神姫の起動とマスター登録と行きますか！」

待ちに待つた瞬間。まずは遙が左手を軽く握り、それを胸に当てた状態でゆっくりとパソコンのエンターキーを押した

「F10-17-N-ストラーフMk2・ラヴィーナ、初期起動モードに移行。マスターの登録及び神姫の名称設定を行つて下さい」

「神姫は最初に起動した時は初期起動モードになつてているんだ。神姫の視界に自分の顔が映る様にしてから何かを話す事でマスターが登録される仕組みさ。名称の方はPCの方に入力画面が出るからそこに入力すればいい」

「えっと、それじゃ……よろしく、ね」

遙がラヴィーナと田を合わせておずおずと声を出すと

「容姿登録、声紋認証確認、マスター登録を完了。次に神姫の名称設定に移行します」

「名前……」

遙はしばらく考えていたがやがて頷くと

「決めた……あなたの名前は」

遙はパソコンに名前を打ち込み、再びラヴィーナと田を合わせ

「……レイナ」

そう告げてエンターキーを押した

「名称『レイナ』、登録完了。初期起動モード全プロセス完了を確認。通常起動へ移行します」

そう言つて、ラガヴィーナことレイナは再び目を閉じ、また開けた。さつきと違うのはその目に光が宿つており、レイナは体を起こし立ち上がると、遙の方に目を向けて

「はじめまして。突然で申し訳ないが、私はマスターの事はどう呼べばいい?」

「遙でいい……よろしくね、レイナ」

「遙、か。判つた、よろしく」

遙は無言で頷く。その表情は喜びで僅かに赤みを帯びている

「ラガヴィーナの方は無事に起動したね。それじゃ次はテンペスタの方だ」

「はい」

拓哉は返事をするとテンペスタの方に向き直り、深呼吸をしてからエンターを押す。やがて、レイナ同様、テンペスタも初期起動モードに入り、さつきの遙と同じ様にマスター登録を済ませ、名称設定に入る。拓哉は顎に手をあてて彼女の名前を考え始めるやがて

「セフイ……今日からお前の名はセフイだ

「名称『セフイ』、登録完了。初期起動モード全プロセス完了を確認。通常起動に移行します」

そしてテンペスタ改め、セフイも一度目を伏せて「ちらはめつくりと目を開け、ゆっくりと立ち上がる

「初めましてマスター！ マスター事はじつじつ風に呼べばいいですか？」

「それじゃ、今ままマスターで良いかな」

「判りました。それじゃあマスター、改めてこれからよろしくお願ひしますね！」

セフイは明るい笑顔で言つと拓哉も同じ様に笑みを浮かべる

「ああ、いらっしゃりようしきな。セフイ」

「はいっ！」

一體の起動を見届けると信英は拓哉と遙の肩に手を置いて、2人と2機は信英の顔を見上げた

「どうやら、一體とも無事に起動できたようだな。これでレイナとセフイは一人の神姫となつた。君達にとつて初めての神姫だ。だからと言つてはいけないが末永く大切にしてくれ。そして」

信英はそこで言葉を一旦、切り

「ようこそ、武装神姫の世界へ」

新たに目覚めた二体の神姫と一人の新たなマスターに歓迎の言葉
を告げたのだつた

第6話『神姫マスターとして、彼女の本当の実力』

「これは一体どう言つ事だ、西園寺社長！ なんで一等の当選券が僕じゃなくて他の奴の手にあつたんだ！？」

神姫タワーの宿泊施設の一室、信英が滞在している部屋に一人の少年が押しかけていた。身なりの良い服装にオールバックの金髪。如何にもお坊ちゃまと言つ感じの少年が、備え付けのテーブルに手を叩きつけ信英に詰め寄つており、テーブルの上には少年の神姫と思われる。火器型神姫ゼルノグラードが無言で佇んでいる

「すまない、明久君。どうやら実行委員の方で不手際があつたらしくてね。本来、君に渡すはずだった抽選券が彼女の手に渡つてしまつていたらしい」

「不手際じやすまないだろ！ なんの為にあんだけの大金払つたと思つてるんだ！？」

明久と呼ばれた少年は怒り心頭で信英を問い合わせているが、当の本人は涼しい顔で流している

「明久君。今回の事もそうだが、何でも親の権力や金で解決できるモノとは思わない方が良い。今回の件は不幸な事故だと思って諦めて欲しい。勿論、貰つたお金の方も君の父親に返してある」

その言葉に明久はしばらく信英を睨み付けていたが、やがて舌打ちをした後に「失礼します」と言ってゼルノグラードと共にドアを乱暴に開け閉めして部屋を出て行つた。それを見送り信英はソファに体を沈め

「やれやれ、小さい頃の甘やかしきしきが原因とは言え、北条の方も大変だな……」

その頃、拓哉と遥はセフィイとレイナの武装が入ったケースをその手に持つており、一人の肩にはそれぞれのパートナーが座っている。会場の外に出ると既に日が傾き始め、祭りの初日は終わりを迎えるとし、帰路につく人々も出始めている。そんな時、甚平の頭の上に居たたま子がゆっくりと日を覚まし

「よく寝たです。って、ありや、もつ夕方ですかあ？」

「そういうや拓哉。あんたはこの後どうするんだ？ 一旦、家に戻るのか？」

「ああ、一応そのつもりだが」

「だったらよ、折角だし俺ん家に泊まっていかね？ 姉ちゃんと二人暮らしだから、たぶん問題はないだろうし、祭りは明日も続くんだ。電車賃だつてバカにならんだろう？」

「いいのか？」

「良いつて良いつて。姉ちゃんにセフィイとレイナの事も紹介しないといけないし、それに新米マスター一人に教えてやりたい事はまだまだ沢山あるしな」

「ちよつと待つて」

そう言つと拓哉は携帯（普通の方）を取り出し直ちに電話を掛ける。やがて、2・3言話した後携帯を切ると

「野乃香さんに迷惑掛けない様に、だとわ」

「決まりだな。それじゃ早速「あの……」どつかしたか遙ちゃん？」

拓哉と甚平が話を進めていると遙もオズオズと小さく拳手して切り出した

「お泊り……私も、いい？」

「えつ！？ いや、まあたぶん大丈夫だと思つけど……遙はこの街に住んでるだろ？」

「いいの……私、家で一人暮らしだから。親もたまにしか帰つてこないし」

そう言つた時、遙の表情がものすごく沈んでいたのをレイナは見逃さなかつた

「そつか……まあそれなら問題ないな。なら姉ちゃんと聞いてみるか」

遙の表情の変化に「そきづかなかつたが、なんで親が居ないのか、流石にそこまでは踏み込むべきじゃないと考えると拓哉と甚平は互い目配りをすると深くは言及せず、サラリと流す事にした

「この時間帯なら、まだオフィシャルショップだな。丁度いいからバトルフォンへの機種変手手続きもしつづけ」

今後の予定が決まると一同は神姫センターの方へ足を運んだ

「いつもしゃい……つて、あら、三人ともどうかしたの……？　あれ、拓哉君、遥ちゃん、その神姫ビューブしたのー？」

流石に、今日はお祭りと言う事もあり神姫センターにはあまり人は居らず、オフィシャルショップも殆どガラガラで野乃香も退屈凌ぎにレジのカウンターの席に腰を下ろし本を読んでいた。そんな時、店のドアが開き、拓哉達が入ってきたので本をとじて顔を上げたのだが二人の肩に乗っている神姫に気づき、続けて思わず立ち上がった。そしてカウンターで今日のお祭りでの出来事を聞くと

「なるほど、お祭りのイベント景品だったのね」

「はい、初めてまして野乃香さん。セフィイです。よろしくお願いします」

「レイナ。野乃香、だな。よろしく頼む」

「ええ、よろしくね。セフィイちゃん、レイナちゃん。それにしても

」

一機との自己紹介を終えると野乃香は甚平に手を向けると
「甚平の事だから」「マジっ！ やるやる！ 是非やらせてください
！」 つて感じで真っ先に飛びつくと思つたのにそんな事を言つたな
んてね）。明日は槍でも降るのかしら？」

「オイオイ、実の弟に向かつてなんて事言つてんだよ……」

そんなやり取りを済ませた後、その後は拓哉と遙のバトルフォン
への機種変更手続きを行い、携帯ショッピングへ提出する書類は野乃香
さんに任せ、拓哉達はセンターを後にした。

「それじゃ、早速俺ん家へ……と、言いたい所だが夜まではまだ時
間もあるし、もう一箇所寄り道と行こうぜ」

「どーにだ？」

「へへっ、物凄く良い所さ」

「普段はもつと賑つてるんだが、お祭り時期の、しかもこの時間じ
やこんなもんか。まつ、人が少ない方が今回はいいかもな」

そう言つて、甚平が一人を案内したのは市のゲームセンター。そ
う、甚平は一人に神姫バトルを教えるべく一人を此処に案内したの

だった。が、甚平の言つとおり普段は沢山のギャラリーやマスターで溢れかえっているはずのバトル用の筐体のあるスペースも今は数人のマスターがチラホラ居る程度だ。が、その中に見慣れた少女が居た

「あれ？ あんたは確か

「あら？ 大木戸甚平さんにたま子さん、こんな所で会うなんて、奇遇ですね～」

「あ～、大会の時の人ですか？」

そこに居たのは甚平が大会で戦つたルナリエとそのマスターだった。優雅だが相変わらずどこかおつとりした雰囲気をしている。彼女が拓哉達に気づくと「あら～」と声を出して

「次にお会いするのは神妃校でと思つてましたのにもしかして私達つて、よほど縁があるのかもせんわね～」

すると、少女は拓哉達の方に目を向けて

「まあ～、噂の新型と、そのマスターさんですね～。名前は確か、天音拓哉さんと、志筑遙さん。」

「あ、はい。よろしく」

「……よろしく」

「レイナ、あなたの言つとおり遙のパートナーだ」

「セフイです、よろしくお願ひします。えつと……？」

「あ、申し送れましたわ。わたくしロザリンド・明日奈・フルーベルと申します。名前が長いので、ロザリーと、お呼び下さい。そして、こちがわたくしのパートナーの」

「アルトアイネスのルナリエだよ」

「よろしくお願ひしますね~」

セフイとロザリンドの手の平の上に載つてゐるルナリエも血口紹介を終えるとロザリンドはゆっくつと一礼をして血口紹介を閉じる

「もしかして、ロザリーさんってハーフ？」

「ええ、お察しの通り、わたくしフランス人と日本人のハーフですよ~。ところで、皆さんはどうして此処に？」

「折角なんで新人二人にバトルについて教えてやるつかと思つたんですよ」

「そうなんですか~」

するとロザリーは顎に人差し指を当てて「ん~」何かを考え始め、数秒ほどしてから

「でしたら~、お邪魔じゃなければわたくしも~」一緒にせてもうりつてもよろしいですか？」

「勿論、オッケーですよ。さて、それじゃまずはターミナルに」

「少しいいかな？ その君」

そして、ロザリーも交え改めて神姫バトルの準備をするべく筐体近くにある総長の装置傍に行こうとした所で声を掛けられた

「ん、誰だあんた？ なんか用か？」

「平民は黙つていたまえ、君には用は無いんだ」

「誰だ？ 知り合いか？」

「うーん、どつかで見た様な記憶はあるんだが……」

と、甚平は腕を組んで記憶を探つていたがやがて思い出して

「あ、そうだ。今日の大会の決勝ブロックに居た奴だ」

「いひちらのお方は確か、北条コンツェルンの御曹子さんでしたわよね～？」

北条コンツェルン、神姫バトルを支持するスポンサーの大手企業の事だ

「その通り、僕の名は北条明久。君達の様な平民風情がおいそれと話せる相手じゃないのさ。ただ、今回は大事な用があるから特別さ。さて、そこの新型のアーンヴァルを連れた君」

「俺？」

「そうだ、それは本来は僕が貰い受ける筈だった物なんだが、イベントの実行委員の方で不手際があつたらしくてね、悪いけどそれは僕に返してくれないかな？」

「わ、私ですか！？」

「えつと……？」

突然の事にセフィイは驚きの声を上げるも拓哉の方は本気で話の意味が判らず、甚平に話を振ると甚平はすぐに険しい表情になつて

「たぶんあれだらうな。大方こいつが実行委員か何かに大金払つてあの抽選会で八百長してもらおうとしたんだらうな」

甚平の言つとおり、新春神姫祭りの打ち合わせの為、F-L社を訪問した父に着いて行き、その時に開発されていたアーンヴァルMk2テンペスタを大層気に入り、信英にテンペスタを寄越すよう言い出し始めた。やがてそれが抽選の景品と知るや否や大金を出して八百長を申し込んできたと言う訳だ。そして、信英はそれを受け取り、その場は承諾した。けれど、それには別の意図があった。

彼の父親、北条コンツェルンの現社長は自分の学生時代からの仲。そしてそんな彼が昔の躰の所為で何でも金や権力で解決しようとする性格になつた息子にホトホト手を焼いているのを知つていた為、金や権力で解決できない事もある事を知らす為に一計企てる事にしたのだ。実際、姫祭りの実行委員の方にはなんの不手際も無い。抽選機の中に入つてゐる半券の中に一枚だけ目印をつけたもの混ぜてその抽選券を自分に渡す、それが明久の立てた作戦でそれ自体は問題なく進んでいた。ただ単に信英がその抽選券を実行委員会の手違ないと称して、密かに遙に渡していいた事を除けば

「ほう、平民の割りには頭が回るじゃないか。ならば話は早い。そう言つて、つまり本来その新型は僕のモノになる筈だつたんだ。大人しくこちらに返してくれないか？　ああ、もちろんタダとは言わない」

そう言つと明久は未記入の小切手帳を取り出しそこに手馴れた筆運びで金額と署名を書き込み、拓哉の手に握らせた

「八百長の際に支払つた200万だ。その新型の代金代わりとしてキチンと支払うから安心したまえ」

そして拓哉の肩に乗つてゐるセフィに手を伸ばすが、その手を拓哉は払いのけると小切手を破り捨て

「気に入らないな……神姫をモノの様に扱う態度も、あんたのその性格も」

「マスター……」

「モノの様について、現に神姫はモノじゃないか。何をムキになつているんだい？　ああ、なるほど。確かにその新型はこの世に2つと無い、物凄くレアな代物だ。返したくない気持ちも判るよ。けど、200万もあれば最新鋭の神姫が何体も買えるんだ。どちらが特かは少し考えれば「話にならない……甚平」

明久の言葉を完全に遮り、話す事は何も無いと言わんばかりに拓哉は明久に背を向け

「一田出直そう。バトルの方は明日教えてくれないか？」

「しゃーないな。ホントは一人にも早くバトルを楽しんで貰いたかったんだけど」

甚平の言葉に遙も無言で頷き、4人はその場を後にしようと/orするも明久は4人の前に周り込んで

「どうしてもその新型を返す気は無い」と？

あくまで自分のモノだと言つ様な言い方をする明久に拓哉は溜息を吐いて

「くびいなあんたも。悪いが、たとえ億の金を積んでもセフイを譲る気は無い」

「そうか……なら、仕方ないな」

そう言つと明久は指を鳴らした。かと思つと次の瞬間には黒服を来たS.Pがゲーセンの神姫関係のフロアを封鎖してしまった。流石のこれには周りの他のギャラリーもざわめく

「おいおい、幾ら何でやり過ぎだらー？ こりゃ立派な強盗だぞ！」

恐らくこの後は黒服が拓哉から無理やりセフイを奪い取るものだと思い、甚平が思わず声を荒げるが、明久は甚平に呆れた様な目を向けて

「誰が無理矢理奪い取ると言つた？ 僕はただ彼にバトルを申し出たいだけさ」

「バトルを？」

「そうだ、僕も君も神姫マスター。ならば神姫バトルで決着を着けるのが筋つてものだろ？ 君が勝つたら新型の事は諦める。ただし僕が勝つ場合は大人しく返してもらひよ？」

明久は拓哉に指を突きつけ返事を待っていた。拓哉はセフィの方に少しだけ目を向け、やがて

「……断る」

静かながらに、はつきりと明久の申し出を断つた

「なつ！？」

その返答に驚きの声を上げたのは明久だけ。甚平は「まつ、当然の判断だな」と言えば、周りのギャラリーの中にも納得し頷いている奴が居る

「き、貴つ様。バトルを前に怖気づいて逃げると言つのか！？ それでも神姫マスターの端くれか！？」

「生憎こちらは、まだバトル未経験の初心者ですら無い素人だ。あなたの実力がどれぐらいのもんかは知らないが、そんなバトルはゴメンだ。それ以前に」

今までは呆れ、無表情だつた拓哉がここで怒りを露にした鋭い目つきで、そしてそこで我慢の限界だつたのか遙もはつきしと険しい表情浮かべて拓哉の横に立ち

「そりやつて、武装ならまだしも神姫そのもので平氣で賭けバトルを持ち出す奴を、同じ神姫マスターだとは思いたくない」

「神姫はモノだけど……モノじゃない。私達の……大事な、家族」
二人の気迫に、明久は一瞬だけ気圧されるもすぐに優位に立つ者の顔に戻り

「だが、それならどうするつもりだい？ 悪いけど、バトルを受けてくれるまでは君達を帰すつもりは無いよ？ 勿論、周りの連中もね」

「おいつ！ 他の連中は関係ねえーだろ！」

「そうだね関係ないね。だから、みんなも早く帰りたかつたら彼にバトルをして貰う様説得するんだ」

当然ながらこの様な事態にゲーセンのスタッフが気づかない筈がない。が、相手は神姫バトルを支える権力者の息子。流石のスタッフも手を出せない、と言った所だ。が、明久はここで一つの勘違いをしていた。それは周りの人間は無関係と考えている事。彼らは拓哉達とは直接関係はなくとも同じ神姫マスター仲間である。故に、早く帰りたいからなんて理由で拓哉に、ましてや今日始めて自分の神姫と出会えた彼にそのパートナーを賭けて戦わせるなど神姫マスターの端くれにも置けない様なマネをしよう等と思はもしない。その為、事態が膠着し始めた時だった

「あの～？」

今までずっと黙っていたロザリーが控え気味に手を挙げると

「そのバトルなんですけど、拓哉君の代わりに私が出しゃだめですか～？」

「ちょひ、ロザリーさん、何言つてんですか～？」

「だつて～、このまま此処でこいつしていても皆さん帰れませんし、だからと言つてバトル未経験の拓哉さんに戦わせる訳にもいきませんもの～。でしたらここはピンチヒッターで私が戦つ方が手つ取り早いと思いまして～」

「お前がか？」

突然の立候補に明久が訝しげにロザリーを見つめているとやがてふと思い出す。田の前のこの女は今日の大会で自分と同じ様に決勝ブロックに出ていた女だ。白星の数じや劣つてしまつたが直接の対決では自分は勝利している。確かに、テンペスタのマスターの方は全然自分の意見を変えようとしないし、周りの連中も逆に彼女に思いどまらせる様に説得しており当てにならない。ならばこのままここで膠着しているよりは

「いいだろう、特別に許可してやる。早く準備したまえ」

そう言つと、明久は筐体の操作盤の前に移動しロザリーもその反対側に立つ

「ロザリーさん本気なんですか？もし負けでもしたら「大丈夫ですよ～」えつ？」

「こんな人なんかにはわたくしもルナリエちゃんも決して負けたり

しませんもの）。ねえ、ルナリエちゃん

「うん！ とにかく、ロザリー。今回は僕、本氣出してこいよね
？」

「ええ、勿論。本氣の本氣、全力で

モード、ロザリーは口元には笑みを浮かべたまま皿を鋭く細めると

「お仕置きして差し上げましょ！」

『な、なんだ！？ どうして……こんな』

バトルが始まつてから暫く。明久はあまりの事態に声が震えていた。明久の戦闘スタイルは言わば弾幕。多弾頭ミサイルにガトリングやマシンガンと言つた。数で勝負の武装で弾幕を張り、相手の動きを封じる。もしくは怯ませた所を本命のランチャーで仕留めるという物。実際、大会の時もロザリーはこの戦法で倒れた。なのに今は全然違う。他の奴なら防御するしかない弾幕をロザリーとルナリエはいつも簡単に避けている。弾の間をかいくぐり、左手に持つたアイネスの純正武装、長剣のロッターシュルテンと同じく純正武装のアーマーであるノインテーターの右副腕に持たせたジークムントの一ノ流でミサイルを斬りおとしている。業を煮やし、明久はRA

（レールアクション）を起動。相手の後に回り込みすぐさまランチャーや放つも今度は左副腕に装備されたシールド、ヘルヴォルでガードされる

「弾幕と言つてもただめちゃくちゃに撃つてるだけじゃん。こんなんじゃ僕には傷一つ付けられないよ。それにしても君もかわいそうだよね、こんなマスターを持つちゃつて、神姫はマスターを選べない。それが神姫の不幸な所だよね。でも、負けてあげる事はできないんだよ、ね！」

そう言つて、ヘルヴォルの先端の刃で相手を突き刺し、刃を抜くと同時に蹴り飛ばす

『ぐ、ぐわ～～～！』

『ルナリエちゃん、遊んでいないでそろそろ決めないと、時間も遅くなつていますわ～』

「え～、久しぶりの純正フル装備なのにもう少し暴れたいよー」

『なつ！ あ、遊びだと！？』

こつちは本気で戦つていたと言うのにあつちはそれを遊びと言つのか？ その事にすっかり頭に血が昇つた明久は神姫の静止も聞かず、ガトリング専用のRAを使いガトリングを乱射するもそれもヘルヴォルにガードされる

『ルナリエちゃん？』

『ちえ、は～い』

やがて相手のガトリングが一旦弾切れを起こした所で、ルナリエは副腕に持たせていたジークムントを今度は自分の両手で持ち直して

「それじゃ、これで終わりにするよ！」

そう宣言し今度はルナリエがRAを発動、一旦右の方に移動したかと思うと、今度は一直線に相手に突っ込む。相手の方は機関銃で迎撃に入るがルナリエの前に弾丸を弾くバリアが展開している

『ショットガード、と言つ事は大剣のRAか！』

相手の銃弾を無効化するバリアに一直線にこちらに突っ込んでくる動き、間違いなく大剣のRAによる強襲攻撃と判断し、ショットガードが消える、剣を振り下ろす瞬間を狙い至近距離でミサイルを当てようと構える、が。それがいけなかつた。突然、ノインテーターのスカート部分が一本の巨大なシザーに変形した

「いや違つ！ あれはまさか！？」

防具である筈の装甲武装の変形、そんな事が起るのは一つしかない。甚平が驚愕で目を見開くと同時に

「『僕達（私達）の本気、見せてあげる（ますわ！）！』

相手に肉薄する前にルナリエはシザーで相手の頭部を掴み、反対の方で相手を武装ごと次々に切り刻み、粉碎しながら尚も直進。やがて軽くジャンプし、相手を地面に叩きつける。

『全てを噛み砕く、双龍の顎！』

そして着地と同時に相手の両腕を掴んで横に広げさせた状態、まるで目に見えない十字架に貼り付けにされた格好で上に持ち上げ、ジーグムントで突きの姿勢に入る。

「これが君を屠る、深紅の剛剣！」

各装甲のクリスタルアーマー部分に搭載された小型のコンデンサから大量のエネルギーが供給され、普段は副腕や脚部パーツそれぞれの駆動に使われるエネルギーが全てジークムントの刀身に集まり赤く輝く。そして

「『シザース・ガラース・ドミニオール！』」

「『う、うわあああああ！』」

ルナリエが突きを放った瞬間、赤いエネルギーの奔流が相手を貫く。やがて奔流がおさまると同時に相手を放し、シザーは元のスルトアーマーに戻る。相手は既にピクリとも動かなかつた

第6話『神姫マスターとして、彼女の本当の実力』（後書き）

シザース・ガリアス・ドミニオールはそんな技じゃねえ！ つと違う方、多数かもしだせんがどうも原作のそれが少し地味っぽかつたんでモーションを少し（と言つかなり）弄らせてもらいました。今後もういつ書うことはありますので＾＾；

「そ、そんなバカな……」

一されて、これでご満足いただけましたか？」

ロザリーとルナリエの圧倒的勝利にギャラリーが静まり返つてゐる中、彼女は普段どおりの口調で向かい側で操作盤に手を着き、がっくりとうなづけている明久に声を掛けた

「それでは約束通り、潔くセフィちゃんの事は諦めて下さいね。あつ、言つておきますけど、代理で私が戦つたのはそちらなのですから、今更こんなバトルは無効だ、なんてのは無しですよ」

」」」」」

流石にそんな事は言えない、この状況でそんな事を言つても往生際が悪いだけだ。そんな事をしては自身の沾券に関する。自分にだって日本の上流階級としてのプライドがある

この借りは忘れないぞ……

故に忌々しげに拓哉を睨み付けながら引き下がる事しか出来なかつた。やがて、明久たちが居なくなつたのと同時に

甚平が突然歓声を上げたそれに驚き、遙が一瞬ビクッとなる

「神姫の固有RAを生で見たの始めてだぜ！ やべつ、ちょっと感動した」

それを肯定する様に他のギャラリーも口々に感想の述べたり、「どんな状況で習得したんですか？」等とロザリーに訊ねている者も居り、何の事やら判らない拓哉と遙は置いてけぼりを食らっていた。結局、この件で時間を食つてしまいゲーセンが閉店時間となつた為、拓哉達の初バトルは明日にお預けとなつてしまつた

「さてと、それじゃ私はこの辺で失礼いたしますね～」

ゲーセンの外に出るとロザリーが軽くお辞儀をした

「あの、今日はスマセンでした。それと、ありがとうございます」

「いえいえ～、わたくしはマスターとしてなつていなしの方にちよつとだけお仕置きして差し上げただけですわ～。もしあの時、拓哉さんがバトルを受けてたとしたらあの人と一緒に、めつ～！ つてしまつもの～。そうですわ、三人の連絡先を教えて貰つてもいいでしょ～か～？ 二人の初バトルに、わたくしも立ち会いたいのでお願ひします～」

「勿論ですよ。時間が決まつたら後で連絡しますんで」

「では、改めて失礼いたしますね～」

無論、それを断る理由も無いので三人はロザリーと番号の交換を行い最後に基平がそつとロザリーは最後に手を振りながら、その場を後にした

「せひと、そんじゃ改めて俺ん家に行くか」

「もうだな、今日は色々事がありすぎてもうクタクタだ」

「……私も」

そして拓哉達も雑談をしながらゲーセンを後にした。ロザリーは暫く街灯のついた歩道を歩いていたが、やがて彼女の脇に一台の黒いリムジンが止まり、ドアの窓が下がるとそこには執事服に鼻の下に鬚を生やした男性が顔を出し

「お嬢様、お迎えにあがりました」

「何時もありがとうござります」

そう言つて、車に乗り込むと男性は車を発車をせる

「今日は何か良い事でもありましたかな?」

「判ります~? 実はとても良いマスター達に出会つたんです。
そうですわ、この事を“あの人”にも連絡しておきましょ~」

ロザリーはバトルフォンを取り出してある人物に電話を掛けた。
数回のコール音の後に

『もしもし、こんな時間にどうかしたの?』

電話の向いから優しそうな男性の声が返つてくる

「「んばんわ～。今日はちょっと」「報告がありまして～」

『もしかして、良さそうなマスターが見つかったのかい？』

「はい～、三人程。と言つてもその内二人は、今日マスターになつたばかりなのでバトルの腕は未知数ですけど～」

そう言つて、ロザリーは神姫祭りとゲーセンでの出来事を電話の相手に伝える。すると相手は「ふ～ん」と関心した様な声を出して「億をの金を積まれても譲る気は無い。神姫は家族、か。良い言葉だね」

「ええ～とつても。おかげでの方達の為にわたくし、ダメと言われてましたけどちょっとだけ本気を出してしまいましたわ～」

『「そうだね。もしその場に居たのが僕だとしても恐らく同じ事をしていたと思つよ』

「ですわよね～。それで、そのお一人の初バトルが明日行われるのですけど良かつたらしいかがですか？」

『判つた。こつちも必要な備品や部屋の確保は終わつてるから明日は僕も見に行くよ』

「はい～、でしたら時間が判りましたらメールいたしますわね～」

『うん、それじゃお休み』

「お休みなさいませ～」

「お話は終わりましたかな？ でしたら、オクテット」

「かしこまりましたわ。執事長」

そこで通話を終えてロザリーはバトルフォンを仕舞うと、それを見計りつて執事は誰かに声を掛けた。すると自身の純正武装にして演奏道具でもある、ヴァイオリン用の弓の形をしたボウナイフのリジルとエレキヴァイオリンのグラニヴァリスを装備したヴァイオリン型神姫の紗羅檀シャラタンがロザリーの目の前にやって来て

「お嬢様、BGMに一曲いかがですか？」

「そうですね～。それではお願いいたします～」

「かしこまりました」

そう言つて、恭しく一礼をするとヴァイオリンの演奏を始めた。機械の音では無い、生の音色。ロザリーとルナリエは目を閉じながらその演奏に耳を傾けていた

そして、次の日の朝。午後は神姫祭りのプロのバトルを見たいと言つ事でバトル教室は午前中に行つ事になつた。そして拓哉達がロザリーの到着を待つてゐる

「すいませ～ん。お待たせしました～」

「いえ、大丈夫ですよ。俺達も今来たばかり……って、そちらの人
は誰、ですか？」

そこに一度ロザリーがやつて来たのだが、隣に茶色のショートヘ
アを自然な形で降ろしている。優しそうな瞳をした青年の姿があり、その肩には彼のパートナー神姫と思われる、アルトアイネスの
姉妹機、アルトレーネの姿があつた為、甚平が訊ねると

「こちらはわたくしのお友達の方なんですね～」

ロザリーが彼の方に目を向けると、彼は一歩前に出て

「初めまして、僕は夜月瀬斗。やづきりゅうそしてこいつは僕のパートナーの
」

「あなた達がルナリ工達が言つてたマスター達ですね。私はアルト
レーネのステラです、よろしくお願ひします」

「ロザリーに誘われて來たんだけど、もし迷惑じゃなかつたら僕も
混ぜてもらつてもいいかな？」

「勿論！ 全然問題なですよ。なつ？」

甚平が拓哉達に話を振り、拓哉達も承諾の意を示すと瀬斗は笑み
を浮かべて

「ありがとう、それじゃあ早速行こうか？」

瀬斗がそう言つと5人はゲーセンのドアを潜り、昨日の場所に向かう。流石に朝早くという事もありゲーセン自体に客は殆ど入っておらず、神機バトルのフロアに関しては祭りの真っ最中という事もありガラガラだった

「さてと、昨日は明久の邪魔が入つちまつて出来なかつたが、改めて、甚平＆たま子プレゼンツ！ バトルマスターーズ教室の開催だぜ！」

「開催だぜ、ですう」

「えつと……甚平さん、たま子さんよろしくお願ひしますー。」

若干、テンションの高い甚平とたま子に拓哉達が苦笑する中、セフィだけがまじめに返事をして頭を下げる。そして甚平が筐体の傍にある縦長の装置の少し脇に立ち

「よし！ それじゃまずこの装置を見てくれ。これは神姫ターミナルスポートと呼ばれる装置で俺達は短くターミナルと呼んでるんだ。マスターの基本情報の閲覧や神姫ポイントの支給、武装の所持登録の他には対戦相手の検索を行つたりする装置だ。これから良く使う事になるから覚えておく様に。そして拓哉達が最初にやる事はこのターミナルでホームエリアの設定をする事だ。ホームエリアってのは神姫マスター達が主に何処のゲーセンでバトルをしているかを示す情報の事で神姫ポイントは主にホームエリアのターミナルから受け取る事になる。使い方は簡単、ターミナルの操作盤にエコカードかバトルフォンをセットするんだ

「エコにバトルフォンかカードをセットするのですう」

甚平が説明を終えると、たま子がICカードの差込口とバトルフォンをセットするくぼみの傍に立つ。拓哉が自分のバトルフォンをくぼみにセットすると、最初にホームエリアの設定を行う画面が開き、指示に従つて操作を行うと登録が完了し次に神姫マスターとしての基本情報閲覧や所持登録を行つメニュー画面に移動した

「基本情報の閲覧や武装の所持登録に関してはこれをモバイル化したモノをバトルフォンから直接利用できるから余り使う機会はないかもな。ちなみにホームエリア以外のゲーセンでバトルをしても神姫ポイントは貢えるけど、ポイントの受け取り自体はホームエリアのターミナルでないと出来ないからそこ要注意な？」

そして遙も同じ様に登録を済ませると、二人の基本情報にホームエリアとしてこのゲーセンの名前が表示された

「そんで、次は武装の所持登録。一人とも武装の取り説は持つてるよな？」

甚平の質問に一人はそれぞれケースに入っていた薄い冊子を取り出す。これはセフィとレイナの武装の取り説で中身は武器の性能などが書かれている。ちなみに武装自体は甚平の家に置いて来ており手元には無い。と、そこでただ見てるだけじゃ飽きたのか瀬斗とロザリーが一人の傍に来て

「神姫のバトルは主にリアルバトル、バーチャルバトル、そしてライドオンバトルの3つに別れるんだけど、後ろの二つはこの所持登録を行つた武装しか使う事が出来ないんだ」

「逆を言えば、リアルバトルを行わないなら、武装本体は持つてくる必要は無いんですね〜」

「なるほど、一々武装を持つてくる必要が無い。荷物もかさ張らないし、無くす心配も無い、と言つ事か」

「それに万一無くしたとしても、普通にその武装を使ってバトルをする事ができるんですね」

拓哉達が取り説を見て、セフィとレイナが関心している様に話していると甚平が説明を続ける

「それで、所持登録のやり方だけ取り説の中にその武装の製品番号が書かれてる筈だから、それを所持登録画面に入力すればいい」

「てことは、製品番号さえ判れば複数のマスターが所持登録を出来るつて事になるのか？」

拓哉が疑問に思つた事を訊ねると甚平は得意げに笑みを浮かべると

「それを訊いて来ると思つたぜ。この所持登録はネットワークを通して神姫協会本部と連動して行われるんだ。登録された製品番号は神姫協会のサーバーに全部保管されていて、重複した番号は登録出来ない様になつていいんだぜ。つまり、相手の持ち主に武装の製品番号を教えてもらつても無意味つて事だな。まあ、他の奴が先に番号を確かめて購入した本人より先に登録しちまつたら、その武装は他の奴の物つて事になるから、新しい武装を買つたならその場でバトルフォンを使って登録する事をお勧めするよ」

「……番号、一つしかない？」

早速登録を行おうとしていたのか遙は取り説の中を確かめていた

が複数の武装に対し、番号が一つしかない事に疑問の声を上げるとステラとルナリエがそれに答えた

「それは、お一人のは F A パックと呼ばれる、純正武装がセットになつて売られている品だからでしょう。その場合は一つの製品番号を登録するだけで全部の武装の登録が行う事ができるのです」

「ちなみに F A パックはそれなりに高いけど、個別で全純正武装をそろえるよりは断然お得だから一体目以降の神姫の武装を買う時に参考にするといいよ。ちなみに僕やステラ姉の武装も F A パックで買って貰つたんだ」

二人の説明（ルナリエのは余り関係なさそうだが）を聞いて拓哉と遙は改めて所持登録を済ませ、所持武装一覧に自分達が貰つた武装がカテゴリー毎に表示された

「これで、事前準備は全て完了だね。それじゃいよいよ実際にバトルと行こうか？ 二人とも筐体の方に来て」

瀬斗が手招きで拓哉達の事を呼び、一人が筐体の方に移動。筐体を挟み向かい合う様に立つと拓哉の隣には瀬斗が遙の隣にはロザリーがそれぞれ立ち、甚平はその中間の位置に立つ。筐体はの天井と底の部分が長方形の箱の様な形をしており中央に一部、正方形状に透明な部分があった

「筐体の操作もターミナルと同じでバトルフォンかエコカードをセットするんだ」

「次に、このステージと呼ばれる部分にバトルしてもらひ神姫をセットするんですね～」

二人がそれぞれバトルフォンをセットすると田の前のタッチパネルに画面が表示され、更に操作盤中央の円形状の蓋が開き、そこからステージと呼ばれる部分がせり上がりつて来た。そしてセフィトイナがそこに立つと今度は下に下がつていき、下がりきつた所で蓋が閉じられる

「さて、そんじゃ次は武装のアセンブルだ。さつきも話したとおり、こうした筐体を使うバトルは所持登録を行つた武装しか使えないからな。後、バトルフォンやターミナルで武装のエディットを予め記録しておけばそれを読み込む事で一発でアセンブルを完了させる事が出来るからお気に入りやよく使う組み合わせは登録しておいた方がいいぜ」

説明を受けながら二人は今回は一つ一つ防具の武装をセットしていく。やがて、武器の方を選ぶ段階に入り

「武器の方は六つまで装備できるのか」

「まあ、一応はそうなんだけど」

そう言つて瀬斗はセフィの武器の一覧を見ながら、M8ダブルセイバーとアルヴォP DW11、GEモデルLS9レーザーソードをセットし

「まあはこの3つでバトルに慣れてからの方がいいかな」

「なんでおつなんですか？」

他にもGEモデルLC5レーザーライフルやPPCショットと言つた

ビット兵器もある。いろんな種類の武装を装備した方が臨機応変に対応できる筈と思い、瀬斗に訊ねると彼は「その通りだよ。でも」と説明を始める

「現実でも物をたくさん持ちすぎたら重くて動きが遅くなるでしょ？ それと同じ様に武器も装備数に応じて神姫の機動力にボーナス、もしくはペナルティを受けるんだ」

「3つを基準にそれより少なくしたらボーナスが、多くしたらペナルティをうけてしまふんですね～」

瀬斗の説明を引き継ぎ、ロザリーもレイナの武器一覧からジーラ・ズズルイフ、クルイーク、そしてグリーヴァをセットした

「信英さんの説明だと初期のアーンヴァルと比べ、近接重視のマルチレンジ戦闘を可能した代わりに機動力を犠牲にしたと言つてしまつたけど、それでもアーンヴァル系列が機動力重視の神姫である事には変わりませんもの～。あまり、武装を着け過ぎると返つて、彼女の持ち味を損なう事になりますわ～。逆に、重装甲とパワーが売りのストラーフ系列なら、多少パワーを犠牲に機動力を確保したMK-2でもやつぱし、ある程度武装を装備して副腕もフルに生かした戦闘をお勧めしますわね～。慣れてきたら試してみてくださいな～」

と、ロザリーが発表会で信英が説明した機体の特徴を挙げて、二人にお勧めの武装アセンブルの仕方を説明した

「まあ、ロザリーのはあくまで意見の一つで最終的な判断は君達次第だ。そうしたアセンブルを考えるのも武装神姫の醍醐味だからね。それじゃ最後にバトルフィールドの設定だけど、これは1P側のプ

レイヤーが行えるから相談して決める必要がるね。今回は仕掛け無しの基本フィールド、『ロロシアム』にしてみようか

フィールドの設定も完了すると、次の瞬間、筐体の中央部分がせり上がり透明な六面体が現れ、その中に『ロロシアム』のフィールドが映り、その中に武装を装備したセフィとレイナの姿もあった

「これで、バトルの準備は完了ですわ。ではお二人とも、このバイザーをつけてくださいな」

二人は小型マイクの着いたバイザーを装着。瀬斗とロザリーもその場を離れ、甚平の横に移動し

「そして、最後にマイクに向かって『ライド・オン!』と言えば、いよいよバトルの開始だ！」

拓哉も遙も緊張しているらしく、拓哉は深呼吸をしてから、遙は胸の前で右手をギュッと握りながら

「ライド・オン!」

「……ライド・オン」

開戦の言葉を告げた

第8話『開戦！ 拓哉対遇』

『すつ……』

ライドン・オンの言葉と同時に、バイザーに光が奔り、それが止む頃には視界が一変していた。目の前に広がる光景はさっきまで自分が外側から見ていたもの。けれど、いま自分はその中に居る。

「マスター」

『セフイか？』

「はい」

田の前の光景に感嘆の声を上げて見とれていたら、セフイが自分に話しかけてきた。自分のすぐ近く、と言つよりは自分自身からセフイの声が聞こえたそんな感覚だ。そして次に自分自身の姿に目を向ける。黒を基調とした機械の装甲に包まれたボディ、紛れも無くセフイのものだ。それを自分の身体を動かすのと同じ様に動かしている

「何だか、不思議な感じがします。自分自身の中にマスターが居る様な、そんな感覚」

『そうだな。そして、それは向こうも同じみたいだな』

自分から少し離れた場所。そこにはレイナの姿もあり自分と同じ気持ちらしく自分の両手を見つめている。その時、一人と一機の目の前に『READY』の文字が表示される

「遙、珍しいのは判るがそのぐらいにするんだ。そろそろ始まる」

『……判つた』

そして二体の手の中にデータの羅列が奔り、それがそれぞれの武器を形作る。レイナはハンドガンのジーラヴズルイフを、セフィイはGEモデルLS9レーザーソードをそれぞれ構える。緊張の一瞬、やがて目の前の文字が『GO-』に変わる。

『行くぞー』

「はーつー」

セフィイはレーザーソードの光刃を斜めに下げた姿勢でレイナとの距離を詰める

「迎え撃つ、遙！」

『うん……ー』

それを迎撃すべく、レイナはジーラウズルイフの引き金を引く。飛んでくる3発の銃弾をレーザーソードで弾き、クロスレンジでセフィイはレーザーソードを振り上げる。それと同時にレイナは反対の手に巨大な太刀グリーヴァを持ちセフィイの剣戟を受け止め、ジーラヴズルイフを仕舞い、グリーヴァを両手で握る。二体はそのまま鎧迫り合いの状態になるが、それは長続きはせずレイナがリアパーシ、FLO-17リアの副腕サブアームに装備された、剣先とガトリングが搭載されたシールド、ロークの銃撃を放ち、セフィイは銃撃をレーザーソードの腹で防ぎながらバックステップで距離を置く。

『参ったな。あのシールド、武器としても使えるのか』

「はい、それにあの一本の副腕も厄介です。相手はそれだけ多くの武装を同時に扱えますから」

そして、今度はこちらの番だとばかりにレイナはグリーヴァと一口の剣先を使つた一刀流でセフイに仕掛ける

『けれど、一刀流ならこっちだつて!』

そしてセフイの方もレーザーソードから、M8ダブルセイバーに持ち替え更にそれを一本の長剣、M8ライトセイバーに分離させ、こちらも一刀流で迎撃に入り、ぶつかり合つ4本の剣が火花を散らす。そして、剣戟が納まりかけたところで、セフイは一旦を距離を置き、ハンドガン、アルヴォPDW11で威嚇しつつ空へと飛ぶ

『相手はパワー・タイプ、ならこっちはスピードと三次元移動でかく乱。隙を突いてレーザーソードで、でかいのを一発叩き込む。いいな?』

『判りました。行きますっ!』

セフイはレーザーソードとアルヴォを装備した状態で空を飛び、銃撃で攻撃しつつ、相手のローカのガトリングとジーラヴズルイフの同時銃撃を避けつつ、隙を見て距離を詰めて斬りかかる

『くつ、流石に速い……』

レイナが苦々しく声を出す中、遙は銃撃で相手に近づけさせない

様にしながら頭を働かせた

『……レイナ』

「遙？」

『作戦……聞いて』

ローケの銃撃をセフィイはダブルセイバーに戻したM8ダブルセイバーを目の前で縦に回転させながら防いでいる。その間に遙は自分の作戦を伝える

「判つた。それで行こう」

『……うん』

するとレイナはグリー、ヴァで接近戦を仕掛け。セフィイは今度はそれを迎撃せず、再び空に舞い上るとM8ダブルセイバーを仕舞い、レーザーソードを片手に持ち、アルヴォで威嚇射撃、相手がローケでそれを防ぐと同時にライトセイバーとレーザーソードの一刃流に切り替え、最高速でレイナに向かって急降下を始める

「遙つ……」

『……判つてゐる』

拓哉の作戦は何時か見たエウクランテクニーク杯での真似事だ。急降下の勢いを乗せたレーザーソードの一撃で相手の防御を崩し、ライトセイバーでラッシュをかけ、最後にもう一度レーザーソードの本命の一撃を叩き込むと言うものだ。ストラーフがパワー型なら

ばまず間違いなく受け止める、そう判断しての事だった。けれど

『……今つー』

拓哉の予想は見事に外れた。レーナは攻撃を受け止めず、それをあえて避けた。そして副腕でセフィの首を掴んで捉えると同時に、予め持ち替えておいた。パイルバンカー、クルイークをセフィに打ち込む

『ぐつ・・・』

「あやあつー

捕まつていては得意の高機動力も発揮できず、クルイークの一撃をモロに受けて吹き飛び、2、3回バウンドして床に伏す。レーナが追撃と副腕でグリーヴァを握るとそれを起き上がりかけているセフィに向かって振り下ろし、セフィもレーザーソードの刀身に手を添えた状態で受け止めるが、今度は反対側の副腕のパンチを受けてしまった

「今のはつまい判断だつたね

そして、一人のバトルを観戦していた瀬斗が思わず口に出した

「勢いの乗った大剣の一撃、それを受け止めるとしたらリアパーシの副腕を使うしか無い。恐らく拓哉はそれで副腕の動きが一瞬だけ封じられた瞬間、ライトセイバーで一撃当ててそこから連続攻撃に繋ぎ本命の一撃を放つ作戦だつたんだろうけど、遙はそれを見越してあえて避けるを選んだ。そうする事でフリーになつた副腕で相手を捕らえた所にパイルバンカーの一撃を叩き込んだんだ」

「ですが、元々重装甲型のストラーフであえて攻撃を避けるのは難しいですわよ～？」

最初に説明したとおり、幾ら後継機として多少はその欠点が補われていたとしてもそれでもストラーフ型が重装甲型である事は変わりない。そんな状態で高機動戦闘をしていたセフィイの攻撃を避けるのは難しい事だ

「例え、回避能力が低くとも来ると分つてはいる攻撃を避けるのは簡単ですから。いえ、恐らくは自分に近づかせない為の弾幕を止めて、あえて接近戦を仕掛けた事でそれを誘つたのかもしれませんね」

「ふうん、遙とレイナはそこまで見越してやつたつてこと?」

ロザリーの疑問に筐体の縁に立つて観戦していたステラとルナリエがロザリーの方に目をやる

「たぶん、ね。判つてた上での事なのか、はたまた直感的にそうしたのかは分らないけれど、少なくとも遙はそれだけのバトルセンスを持っている」

「と言つ事はこの勝負はレイナの方の勝ちかな?」

二人ともこれが初陣。つまり互いに経験は0、ならば勝負を決するには才能の差となる。けれど瀬斗はルナリエの問いに首を横に振り「それはまだ判らない。才能と言つて、拓哉も負けてはいないからね」

「どう言つ事ですの~?」

「拓哉とセフィのステータス画面を見て、」

そう言つて、瀬斗はバトルフィールドの外に表示された空間状に表示されたディスプレイを指差す。そこにはマスターの名前と神姫、そして神姫の体力を表すHPバーとバトル中、神姫とマスターがどれだけ一体になつているかを示すシンクron率の数値が表示されている。セフィはさつきパイルバンカーの強力な一撃を喰らつた筈なのに、セフィのHPはあまり減つていない。派手に吹き飛ばされた様に見えてその実あまりダメージは受けていないという事だ

「でも、なんでだ?」

「まあ~、そう言つ事ですのね~」

そしてロザリーも何かに気づき、合点がいったと言つ様に声を出す。甚平だけが未だに判らずにいたが

「マスター、レイナとセフィのシンクron率を比べてみるですか~?」

「一体のシンクron率……? あつ~..」

たま子に言われシンクロ率を見比べ、ようやく甚平も合点が言った

レイナと遙のシンクロ率が安定して居る時は30%前後で、攻撃を受けた時などの集中力の乱れによってぶれた時は20%前半までに一気に下がる。駆け出しのマスターなら最初は大体このぐらいの数值とブレ幅なのに對し、拓哉とセフィのシンクロ率は安定時に45%、シンクロ率のぶれ幅も2~3%程度だ

「ライドオンバトルにおける神姫とマスターのシンクロ率は神姫の攻撃力や防御力と言つた、戦闘力にそのまま直結する。だから言つたでしょ？ 才能と言つては拓哉も負けていないと」

遙が優れたバトルセンスを持つて居るのに対し、拓哉は神姫と高い次元で安定したシンクロをする事が出来る。最も拓哉の場合は剣道の稽古で培われた強靭な集中力も絡んで居るのだろう

「だからこの勝負。まだ結果は見えないよ」

そう言って、瀬斗は口元を吊り上げながら、視線をステータス画面からバトルに目を戻した

拓哉と遙が激闘を繰り広げている中、バトル筐体のフロアに一人の少女が近づいてきていた。意思の強い鋭い目に赤みかかった茶髪をポニーテールにしている。そしてその肩にはエウクランテが乗っている

「流石にこの時間帯じゃガラツガラねー。殆ど人が居ないわ」

「どうしよう千歳、素直に毎にまた来る?」

「嫌よ、午後は神姫祭りでプロのバトルを見たいんだから。とりあえず、あそこに何人か居るからあいつらに相手してもらつて……つて、よく見たらあそこに居るの甚平じゃない」

「あれ? 確かにそうみたい。おーいー 甚平、たま子ーーー!」

千歳と呼ばれた少女が甚平氣づくと小走りで甚平に駆け寄り、肩に居るエウクランテが声を掛けた。そして甚平が彼女達の存在に気づくと

「千歳? お前、なんでこんな所に居るんだよ。神姫校の受験勉強をしてたんじやなかつたのか?」

突然、名前を呼ばれ振り返るとそこに居たのは小学時代の幼馴染3人組の最後の一人、小早川千歳だった。彼女は今、神姫校の一般受験を受けるべくバトルも我慢して家で猛烈勉強中の筈だったのだが

「毎日毎日勉強ばっかだったら飽きるつての、今日は一日気分転換よ。それより、あんたこそ何してんの?」

千歳が肩を竦めて甚平の疑問に答えると、腕を組んで甚平の隣に立つ

「新米マスター二人の初バトルを観戦つて所だな」

「ふーん、いま戦つてゐる一人、ビギナーなんだ。なら私の相手にはならなさそうね……つて！」

そして、今、繰り広げられているバトルに目を向けた。そして、今バトルをしている神姫が自分の見た事無い事に気づく。が、そこはすぐに新型か何かと予想できた為、特にノーリアクションだが二体のステータスを見た所で目を見開く

「いまバトルしてるの遙と拓哉じゃない！？ なんで拓哉が此処に居んの！？ なんで二人がマスターになつてんの！？ つてか拓哉の初バトルでシンク口率45パーセント何つ！？ と言うかこの二人はどうやら様つ！！？」

「一度に聞くなつての！ 後でちゃんと答えてやるから落ち着けー！」

矢継ぎ早に甚平に詰め寄り、彼の肩を揺さぶる千歳。甚平は千歳を軽く押して引き離し

「あ、あの～……」

「彼女、君達の知り合いなのかな？」

二人のやり取りが途切れかけた所でロザリーがおずおずと会話に入り、瀬斗がその続きを口にする

「ああ、スマセソ。えつと、こいつは俺と拓哉の小学校時代の幼馴染で」

甚平が千歳の事を紹介しようとした所で千歳は一步前に出て相変

わらす腕を組んだまま

「小早川千歳よ。」^{ヒツカハシ}相棒のアーシア、ヨロシク

「私はエウクランテのアーシア。よろしくね」

「おまつー。年上に相手になんつー話し方してんだー?」

「あらあら~、別に構いませんわよ~」

「年上の言つても年も一つしか違わないしね」

「だから~、気にする必要なんてないんですよ~」

「ほひつ、あつもせひつてゐるんだから問題ないって」

「そひそひ、問題ないよ」

「お前らが威張つて言つ事じゃないだろ……」

と、相変わらずな千歳の反応に基平ががつくりと背中を落とした所でタイムアップによる試合終了のブザーがなる。少しの差でレインアが勝ちだ、二人はバイザーを外しステージからセフィとレイナも出てくる

「ゴメンなさいマスター、負けてしまいました……」

「初陣だし、気にしなくていいさ。それよりも今はバトルを楽しめたかどうかの方が大事さ」

「やつたな、遙」

「うん…… レイナも、お疲れ」

拓哉と遙がそれぞれのパートナーに労いの言葉をかけていると瀬斗とロザリーの二人が拍手を送り

「おー入とも、ともいバトルでしたわ~」

「わづだね、結果はともかく二人とも初めてにしては上出来や」

「あひ、もう終わつたの?..」

「あ、千歳……」

「えつー、千歳!~?」

セフィイを肩に乗せた所で拓哉は千歳に氣づき、顔を上げると千歳も手を軽く挙げて

「久しぶりね拓哉、まさかこんな所であんたに会うなんてね。そして遙も、念願叶つて遂に神姫デビューしたのね? よかつたなじやない。その子達があんた達の神姫つて説ね」

「は、はい、セフィイです。ようじくお願ひします」

「レイナ。遙、知り合いか?」

「小早川千歳…… 中学の、同級生」

「なるほど」

バトルの後、筐体脇の長椅子に女子三人が腰を下ろして男子3人がその向かいに立つ。そして甚平が昨日の出来事を千歳に説明した

「なるほど、昨日そんな事があつたのね。にしても……」

そこで千歳は言葉を切ると、ニヤニヤ顔になり

「甚平がそんな事するなんてめつずらしいわね。あんたの事だから「マジでっ！？ ラッキー――！」とか言って、真っ先に食い付くもんだと思ったのに明日は隕石でも降るのかしら」

などと、まるで何処か聞いた様な台詞を言つと甚平はハアと溜息を吐いて

「お前も姉ちゃんも俺の事なんだと思つてんだよ……俺だって友情に厚い時ぐらいあるつての」

「と言つても、その後はしつかり斬りされたけどな」

「あ、やつぱり？ 良かつた、甚平はやつぱり甚平な訳ね。安心したわ」

「お前ら……」

拓哉達三人にとつては昔懐かしいやり取りに甚平を除く、4人と神姫達がそれぞれに笑い声を上げる。

「そんじゃ、早速もう一回バトルするわよ！ そうね、今度はタツ

グマッチにしましょ。あたしと遙と拓哉と甚平のコンビで

そして千歳が勢いよく立ち上ると、拓哉のより濃い紫色をしたバトルフォンを一人に見せる

「おーおー、いきなりタッグマッチなんて難しそぎねえか?」

「なに言つてるのよ。何事も経験よ、経験。拓哉と遙も勿論やるでしょう?」

拓哉と遙はそれぞれセフィイとレイナの方に目をやり、二人も力強く自分のマスターに頷き返した。

「……やる

「俺も賛成だ。兎に角、今は色んなバトルをしたい」

「決まりね。ホラ甚平、たま子、時間無いんだから、そつそと準備する!」

そう言つて遙は操作盤が4つになつてたタッグバトル用の筐体に移動し、いそいそと準備を始める

「やれやれ、しゃーねえな

「しゃーねえな、ですぅ

そして、残りの三人もそれに続き、やがて4人のタッグバトルが幕を開けた。その様子を瀬斗達は静かに見守り、瀬斗の顔には優しげな笑みが浮かんでおり、やがて何かを決めたかの様に頷いき、ス

テラはそんな瀬斗に声を掛けた

「マスター瀬斗」

「そうだね、彼ら4人に決定だ」

「拓哉さんに遙さん、甚平さんと千歳さん。ふふつ、これから樂しくなりますわね~」

「ロザリー、楽しむだけじゃダメだつてば。ちゃんと目的もあるんだから」

「わかつてますわ~」

そうしたやり取りを交わし瀬斗達は再び、バトルを繰り広げる4人に目を向ける。が、その途中で

「それじゃ、僕はそろそろ行くよ」

「あら~、もうそんな時間でしたか？ これから最終試験ですのね~。がんばってくださいね~」

「ステラ姉、ファイトだよ」

「ありがとう、ルナリエ」

「うん、これをパスしたら~」

瀬斗は時計を確認した後、ステラを肩に乗せてどこかに行こうとして、ロザリーは手を振り、ルナリエはステラにエールを送る

「僕もプロマスターの仲間入りだ」

第8話『開戦！ 拓哉対遙』（後書き）

さて、今回の突つ込みどころはリリス何処行つた！？ でしょうね。今作では原作の千歳ポジションには別のキャラを入れる予定なのと、ストラーフ型は既にレイナがいると言う事でエウクランテ型を千歳のパートナーにしました

第9話『終わる前奏曲（ヒンドオブオーバーチュア）』

それから、拓哉達は時間ギリギリまでバトルをした。5人だけでなく神姫祭りに行かずにゲーセンに来たマスターともバトルしたりした（主に拓哉と遙と千歳が）。後は神姫祭りでプロのバトルを観戦。それが終わる頃にロザリーは瀬斗の所に行くと言つて別れ、4人は野乃香の所に戻つてきていた

「お疲れ様。どうだつた、初めての神姫バトルの感想は？」

流石に昨日みたいにガラガラとは言わず、客はそこそこ入つている。故に野乃香も在庫チェック等の仕事をしながら拓哉達の話を聞いている

「……す”く楽しかつた」

「同感です。ただのゲームなんかよりずっとハマりました」

「そう、気に入つてもらえて良かつたわ。つて、私が言つのも変な事ね」

ふふ、と可笑しそうに笑う野乃香。それから、4人は再び甚平の家に移動し、甚平の持つてた過去のFバトルのDVDを見たり、神姫も含めてジユースとお菓子で談話に花を咲かせていた。そういう内に日も暮れ始めた所で

「さてと、そんじゃ私はそろそろ帰つて勉強の続きしてくるわ。こうなつたら私も何が何でも合格しないと私一人仲間はずれなんてゴメンだもの。それに」

「それに、何だよ？」

甚平が千歳に先を促すと千歳はヤレヤレと肩を竦めながら

「「」の男共一人の世話を遙一人で出来るとは思えないしね

「いや、どちらかと云つと……」

「千歳が俺らの中で一番のトラブルメーカーになつてた様な……」

「なんか言つた、そこの一二人？」

「「イエ、ナンデモアリマセン……」」

千歳が一人を睨み付け、指をポキポキ鳴らして威嚇すると二人は同時に押し黙る。そして遙の方を向き直るとさつきとは違う優しい眼差しで

「じゃあ遙、私は帰るわね。あつ、そうだ。後でそここの男一人に私の連絡先教えといて頂戴」

「……うん」

「アーシア、そろそろ戻るわよ」

「判つたよ千歳。それじゃみんな、今度は神妃校で会いましょう

「はい。」

「ああ」

「またなのですっ」

そしてアーシアは千歳の肩に乗つかると手を大きく振り、千歳も最後に首だけをこちら向けて軽くウインクをして甚平の家を後にした。そして、それから約10分後ぐらに

「そんじゃ、ボチボチ俺達も帰るか。セフィ、そろそろ行へべ」

「うん……レイナ」

拓哉と遙も立ち上がり、それぞれの神姫に呼びかけるとセフィとレイナもたま子に軽く手を振つてそれぞれのマスターの肩に乗り、甚平の家を後にした。そして遙は拓哉を見送ると言つので駅まで一緒に来ていた

「それじゃ、俺もそろそろ帰るよ。本格的にこっちに移り住むのは3月になつてからだな。まあその間もこっちには遊びに来るけど恐らくそんなに頻度は多くないだろつな」

「…………」

「そんな寂しそうな声をだすなつて。高校始まれば同級生、嫌でも毎日の様に顔を合わす事になるさ」

「うん……」

「まあ……その頃にはバトルの腕は離れてるかもしねいけどな」

「ふふつ」

そして一人して軽く笑い合つ

「それじゃ、またな」

「また……セフィイも」

「はい、遙さん、レイナさんもまた春に！」

「ああ」

その言葉を最後に拓哉とセフィイは駅の中に入つていった

拓哉を見送り、レイナと一人つきりになつた遙はその足でそのまま帰路につく。やがて家に着き、中に入る。案の定、玄関には靴は無く人間は自分しか居ない。そしてそのまま自室に戻り荷物を置く

「リリには、遙だけか？」

自室のパソコンにクレイドルを繋ぎ、そこへレイナを座らせて自分の机の椅子に座る

「うふ……お母さん、遠くの病院で働いてるから……。お父さんは……」

そこで遙の表情が暗く俯きがちになる。レイナが「言いたくないなら言わなくていい」と言おうとした所で遙は顔をゆっくりと上げると、同じく机に置いてあつた写真立てに目を向ける。そこには二人の夫婦とその間に遙の姿が写っていた

「戦場カメラマンやつてて……一年前に紛争で……」

「そうか……」

殆ど家に戻つてこない母親に既に他界した父親、故に遙は一年を通じて殆どの日を一人で暮らしている。拓哉みたいに自らそれを望んだわけでも無いのにだ。けれど、この間の元旦やクリスマス、自分の誕生日と言つた特別な日には決まって戻つてくるし風邪をひいた時も近所の人が看病してくれる様に計らつてくれている為、決して母が自分の事を蔑ろにしていい事は判つている。それでも自分の中の寂しいという気持ちは決して無くならなかつた

「でも……今日からは、レイナが一緒」

遙が神姫を求めていた理由はここにある。自分の孤独を癒してくれる誰かの存在、それを遙は神姫に求めたのだ。人と同じ感情を持ち人と同じ様に生き、そして何時もマスターと一緒に居てくれる神姫に。けれど、母が生活の為に入ってくれるお金を神姫の購入の為に使つのは躊躇われた。故に遙は今まで神姫を買えずに居た。そんな時だった、新年を祝うあの日にレイナのマスターとなつたのは。それは一年が始まつたばかりだが遙にとっては今年一番の幸運だと確

信してこる

「遙……」

「だか、ひきつて……」

今までの寂しい表情と違つ、優しく満ちた笑顔で遙は

「これからは樂しくなる……」

「ああ、やうだな」

はつきつて、確信を持って

「全く、激動の一日前だったな……」

みんなと別れ、帰りの列車に乗り込んだ所でこの一日の疲れがど
ッと来たのか拓哉は座席の背もたれに背を預ける。ただ単に甚平と
お祭りを見て回るだけのものだとばかり思っていた。けれど、たつ
た一日だけだといつのに拓哉にとつては今まで以上に密度の濃い、
それで居て何処か充実した日々に感じられた。そしてその中でも特
に衝撃だったのは

「マスター、どうかしましたか？　わたしの事ジツと見つめたりして」

やはり、セフィとの出会いだろつ。自分の中じゃ高校になつてからバイトを始め、夏休み中には神姫を買うつといつ予定だつたのに、甚平の厚い友情（ただしギブアンドテイク有り）からセフィのマスターとなり、神姫バトルも体験した。やはりそれが拓哉の中では一番大きなウェイトを占めている。こっちの視線に気づいたのか、ジユースや弁当を置く為のミニテーブルの上で座つていたセフィがこちらを見上げ、訊ねてきた

「何でもないよ。ただ　　」

「ただ、なんですか？」

たつた一日だけでこれだけの事があつた神姫市での生活。自分はこれからそんな場所で最低でも7年は過ぐ」す。そう思うと

「退屈しないですみそりだな、つて思つてな」

「そうですね、私も楽しみです。マスターとのこれから的生活」

俺にとつてはそれだけじゃないんだがな、と思いながら拓哉はセフィに微笑みかけてから外の景色に目を移したのだった

粉雪が舞い散る冬の日、一人の少年少女の下に天使と悪魔が舞い降りて物語の序章は終わりを告げる。少年達は一度、それぞれの場所へと帰り

そして、始まりと出会いの象徴たる春。物語は本格的な幕開けを告げる……

第9話『終わる前奏曲（エンドオブオーバーチュア）』（後書き）

序章はこれにて終了です。本編に入る前に拓哉達4人のキャラの紹介を挟んで本編に入ります。年上一人組みの紹介はもうちょっと後の方で

登場人物&パートナー 神姫紹介 part1 (前書き)

とりあえず今回はメインキャラ四人とそのパートナーの紹介です

・天音拓哉（あまねたくや）

神妃学院高等部に入学する16歳の少年。超が着くほどの神姫大好き少年。その情熱は日本で最も神姫が盛んな街、神姫市に移り住むべく神妃学院の合格に中学の3年間を全て費やす程。中学時代は剣道部に所属し、その腕も上々、全国で優勝経験を持つほど。甚平、千歳とは小学時代の幼馴染で三人の中じや一番遅れてマスターとなつた。神姫市でのこれから的生活はきっと退屈しないだろうと樂しみにしている。

・セフィ

拓哉がマスターを勤める天使型神姫。型番及び個体名称はFLO16/T-アーンヴァルMK2・テンペスタ。FLO社が新たに開発したFLO16・アーンヴァルMK2のプロタイプにしてリペイント。見た目も今までのアーンヴァル型と違い、薄いパープルヘアに黒のボディペイント、武装の方も黒を基調としている事から墮天使を思わせるイメージがあるが性格は旧型のアーンヴァルの性格を踏襲している為、とても従順で素直な性格「嫁にするのにお勧めな神姫」と言うのは変わっていない。セフィのバトルスタイルは高機動近接重視バランス型。空と陸を縦横無尽に動き回る三次元移動と銃剣を主軸に相手を翻弄、隙をついて大剣の一撃必殺を狙う、アーンヴァル型の基本的特徴を生かした戦法を取る

・志筑遙（しづきはるか）

同じく神妃学院に入学する少女。甚平と千歳とは中学からの同級生

で、とても控えめで物静かな性格だが第4話で甚平に対し「冗談を言つたりなど愛想は決して悪くなく、思つたこともある程度は口にするなど自分の意思も強い。母が遠くで働き、父は2年前に他界した事で自宅では殆ど一人ぼっちで生活していた。その為、家事能力は主婦クラスに達している

・レイナ

遙がマスターを勤める悪魔型神姫。型番及び個体名称はFLO17/NL-ストラーフMk2・ラヴィーナ。テンペスタと同時に開発された新型神姫、FLO17・ストラーフMk2のプロトタイプにしてリペイント。こちらは黒のヘアカラーにボディペイントと武装は白を基調としている。彼女の身の上を知り、マスターと神姫の関係ではなく遙の家族として彼女の傍に居ようとしている。元は近接パワーモードの神姫だがレイナのバトルスタイルは汎用武装も使った遠距離戦闘となつており、副腕を含めた4本の腕を使った一斉射撃（フルバースト）は脅威

・大木戸甚平（おおきどじんぺい）

幼馴染三人組の一人で三人の中じゃ一番目に神姫のマスターとなつた少年。底抜けに明るいハイテンション、出来ればハイテンションバカと称したい所だが四人の中でも優れた頭脳を持っており、抽選会の裏に八百長があつた事を一番に察するなど、決してバカとは呼べない。本来は自分がマスターになる筈だったテンペスタのマスターの座を拓哉に譲る（最後にギブアンドテイクを持ち出したが）等、とても友達思いの少年である

・たま子

甚平がマスターを勤める猫型神姫。型番及び個体名称はK-T36C

1 - 猫爪^{マオチャオ}。神姫の中でも初期の方に開発されたタイプだが、親しみ

やすい天真爛漫の明るい性格と近接特化と言つ戦略面に悩まずに済む性能から今も根強い人気を誇っている。CUCの組み合わせで基本性格こそあまり変わっていないが、「～なのだ」と言ひ語尾が「～ですう」に変わつておりよく甚平の言葉をリピートしたり、単語を言い間違えたりする（例：ふつか者　ふつつつか者）。戦闘スタイルは基本性能に則り、高機動近接特化型。射撃はてんでダメダメだが、一度懷に飛び込む事を許してしまえば、優秀なマスターでなければ後は一気に叩きのめされるのみとなる

・小早川千歳（こばやかわちとせ）

幼馴染三人組の一人で自称三人の中のリーダー、他称三人の中のトラブルメーカー。とにかく気の強い、曲がった事が大嫌いな性格をし、他が敬語を使つていた瀬斗やロザリーに対しても遠慮なくタメ口で話す。自分の心に誰よりも従順で思つた事は即口にし即行動に移し、それが2人を引っ張つていつた事もあると同時にトラブルを招く事もある。明久との一件の時にもし千歳が居たら間違いないく、黒服との乱闘騒ぎが起きてたに違ないと親友ノは語る

・アーシア

千歳がマスターを勤めるセイレーン型神姫。型番及び個体名称はM08SR - エウクランテ。セイレーンの名の通り空中では優れた機動力を持ち、武装の方も遠距離から近距離まで幅広く対応している。基本性格は素直で考え込み過ぎる面を持っているが、アーシアは考える前にまず動く性格となつていて、戦闘スタイルは空戦バランス型で、更に足技のラッシュで相手の動きを封じた所に大型ランチャーテンペストによる零距離射撃はアーシアの必殺コンボとなつ

て
こ
る

第1話『始まりの春、神妃学院高等部入学式』（前書き）

いよいよ本編に入りますが、授業の講義と言つ形で序章で説明されなかつた世界観や、神姫の設定についての説明が入るのでもうしばらく、長い説明文等が所々に入ります^ ^ ;

第1話『始まりの春、神妃学院高等部入学式』

あの日から役3ヶ月が過ぎた。降りしきる雪も雨へと変わりだし、一面真っ白に積もっていた雪も今は所々に僅かに残り冬の残滓を感じさせる程度だ。冬が過ぎ去り本格的な春の訪れを感じさせる中、とあるマンションの一室、その居間で一人の少年と一体の神姫が朝食タイムを満喫している。チョコレート色のズボンに白の半袖のワイシャツ、紺色のネクタイを締めてその上からクリーム色のベストを羽織っている。彼がトーストを齧っているのを眺めている神姫も襟から胸、そして袖の部分は白地にチョコレート色のライン、そこから下はチョコレート色一色に薄い黄色のスカーフをまいたセーラーと同じチョコレート色のスカートを着ている

「マスター」

「ん？」

「いよいよ今日から神妃学院の入学式ですねー。」

少年、拓哉は自分の神姫であるセフィの言葉に頷いて、コーヒーをカップを片手に窓の外に目をやる。今まで住んでいた田舎町とは違う都会の町並み、遠くには一際大きな建物、神姫タワーの高層ビルが目に映る

「ああ、いよいよだ」

「コーヒーを飲み干してから拓哉は席を立ち、セフィは彼の肩の上に乗る。それを確認し通学用の鞄を反対の肩に担ぎ

「よし、じゃあ行くか！」

「はいー。」

そして拓哉とセフィは部屋を出て自分の新たな母校、神妃学院高等部へ向かつたのだった

神妃学院、高等部と大学部の二つからなる学校で神姫のマスターならばほぼ全員が第一志望に選ぶ学校。その理由は教育制度にある。それは学びの場に神姫が強く根付いている事、こここの生徒職員の殆どは神姫と共に授業を受けている。教育の場と言つのはまだ知識を身につけるだけの場所では無い、他の人との触れ合いや経験を通して人間に成長する為の場でもある。が、ゲームやネットと言つた室内での遊びが充実してきた事や、他の理由で引き籠もりになり他者との関りを絶つている者も居る。そこでこの学園の理事長が目をつけたのが神姫だ。普通ならクラスで孤立し、引き籠もりになりがちな生徒でも自分を慕ってくれる神姫とならコミュニケーションも取りやすいし、神姫と言う共通の話題で他の人の輪にも入つていけるかもしれない。

「それでは、これより第26回神妃学院高等部入学式を執り行います。まず始めに学院長よりお話をいただきます」

現に神姫がカウンセリングを務め、見事に引き籠もりを脱出したマスターが居ると言う事例も存在している。それらを理由に神妃学院では神姫も教育の場に姿を見せてている。それだけでは無く、授業の中には神姫関係の授業が含まれている。バトルの腕を磨く授業や神姫マスターとしての道徳を学ぶ授業が週2・3回行われており、成績も神姫のマスターならば普段からの神姫との接し方やバトルの腕も含め、一学生と言つよつは一マスターとして評価される仕組みを取つてゐる。更にまだ自分の神姫が居ない生徒が早く神姫を購入でさる様に学園の方でバイトの斡旋も行われてゐる。そんな神妃学園を筆頭に神姫を推奨した授業スタイルをとる学園はふえつつあり、今では他の部活同様に神姫バトルの大会も開催されているほどになつてゐる

「フワア～～～定番つちや定番とは言え、やっぱしなげーな、校長の話……」

しかし……そんな斬新な授業スタイルの最先端を行く神妃学院でも入学式や卒業式での校長や理事長の話がとてもなく長いと言つ所はお約束らしい。話が始まリもうすぐ20分、甚平は欠伸を隠さず、たま子は既に眠つてゐる。しかもこの後は理事長との話もあると思うと、拓哉の方も少しげんなりしてくる。そして拓哉も欠伸をかみ殺し始めた所で漸く校長の話は終わり、次は理事長の話となる。

「次に、当学院の理事長、明日奈一成様よりお話を頂きます」

(明日奈……?)

聞き覚えのある苗字に拓哉と甚平の眠気が吹き飛ぶと同時に、校長と入れ替わりで一人の男性がステージに立つ。そして話の内容をまとめた原稿をスーツの内ポケットから取り出し

「新入生の諸君、入学おめでとう。私が『』の理事長を務める、明日奈一成と言います。本校は」

そして、理事長の話が始まると同時に甚平も同じ事を思ったのか小声で拓哉に声を掛けた

「なあ、拓哉。明日奈つて名前もしかして?」

「俺も同じ事を思っていた。ロザリーさんの事だろ?」

「つじ」とはロザリーさんつて本物のお嬢様なんですね

「同じ上流階級でも明久とはえらい違いだな……」

甚平の呆れ声に拓哉とセフィイも頷く。片や人や神姫に優しいお嬢様で片や金と権力をフルに濫用するわがままお坊ちゃん

「そりいや、明久の奴はどうなったんだ?」

「北条コンツェルンはこことは別の地方にあるからな。地元の学校にでも通つてんじゃね? まあ最も、あんなボンボンじやこの学院の受験は突破できないうけだな」

そこでセフィイが険しい表情で会話に参加する

「私……あの人キライです。私たち神姫を物の様に扱うなんて……。しかもあの人神姫なる様に裏で細工をされていたと思うと、私……」

「……」

「セフイ……」

「ですから私、あなたがマスターで良かったです。それはハッキリと言つ事が出来ます！」

「 では最後にもう一度、新入生及び彼らの神姫諸君、入学おめでとう」

そこで、一成の話も終了し入学式の全プログラムが終了。生徒達はそれぞれの教室に戻つていく

「まあ、あれだ。どうせ明久とはもう会わんだろうし、そんな奴の事なんか忘れよつぜ。セフイのマスターは拓哉なんだ。それはセフイがセフイである限り絶対に変わらないしな」

甚平の言つとおり、神姫のマスターとは一度登録が済むとそう簡単には変えられない。変えるには一度神姫を完全停止状態にしCSCを換装し直す必要がある。しかし、それはその神姫の死を表す。当然、今までの記憶は消失、CSCの組み換えから人格の多少の変化をもたらす。即ち、神姫のマスターを変えるには神姫自身が死を迎える必要があるのだ。明久は既に拓哉がマスターとして登録されているにも関わらずそれをやるひとしたと言う事だ

「んな事より！ セフイと教室に行こうぜ、教室。セフイクラス表見てきたけど、4人とも同じクラスなんだ」

「ああ、居た居た！ オーイ、拓哉、甚平！」

二人が教室に移動しようとしたまさにその時、遠くの方で千歳と遥が待ち構えていた

「噂をすれば何とやら、だな」

「ふふつ、そうですね」

「何、話しているのよ？ ほら、そんな事よりもさつと教室に行くわよ！ 窓際一番後ろの席が取られちゃうじゃない」

「お前な、既に授業は寝る気満々かよ……」

「あら、神姫の授業だけはキチンと出るわよ？」

「だけかよ！？ 他の授業もちゃんと受けろよ、おこー！」

千歳の急かす理由に甚平がツッコム、拓哉と遙、そして彼らの神氣はみな苦笑を浮かべつつ四人と四体は教室へと移動したのだった

結局、窓際ではあるものの、一番後ろは取れず真ん中より一つ二つ後ろの席になり、「立腹の千歳とその周りに陣取った拓哉達。改めて周りを見渡してみると、クラスメートの殆どが神姫のマスターでありマスターで無いのはほんの数人程度だ

「予想はしていたがやつぱりみんな神姫のマスターなんだな」

「クラスメートであると同時に高神連の出場を競うライバルって奴ね」

「……高神連？」

「全国高等学校神姫連盟。通称高神連、アマチュアマスターの中でも高校生の神姫マスターの為のバトル大会を開催している神姫協会の下部組織の事だよ。各地方の予選を突破したマスターを集めて全国大会を開き、日本一の高校生マスターを決める大会なんだ」

「私達の様な高校生が日本一のアマチュアマスターを決める大会、武装神姫アマチュア全日本選手権に出場するには、まずはこの大会で上位に入賞しないと行けないの。そしてそこから更にプロマスターの認定試験に挑戦するにはこの全日本選手権で優勝する必要があるって訳」

千歳の口から出てきた単語に遙が首を傾げると、千歳とアーシアが説明を始め、甚平がそれを引き継ぐ

「けれど、今のところ高校生の段階で全日本に出場し、更にプロマスターの資格を取れたのは現F1チャンプ、竹姫葉月のみと言われている。俺達学生がプロを目指すのはそれだけ難易度の高い事なんだ」

「千歳とアーシアは、それを目指しているのか？」

「当然！ やるからには優勝、そしてプロ一直線よー。やつてやれない事は無いんだからー」

「その通り、そしてゆくゆくはF-1チャンピオンとのパートナー神姫になるんですから。」

「す、すいこやかの氣ですか……」

「まあ、田標を持つだけならタダだよな」

それに對し、レイナが口を開くと千歳とアーシアはハッキリと宣言し立ち上がった。そこで、教室のドアが開いたと思う青い髪をしたハウリン型に誘導される様に一人の女性が入ってきた。長い髪を根元で縛つて降ろしており、その目は何故か両方とも閉じられている

「さて、みんな揃っているかしら？ それじゃこれから出席を取るわね。リッキイ、私が生徒の出席を確認するからチェックを付けていつてくれる？」

「判りました、早苗さん」

やうやくと早苗と言つ女性は教壇に出席簿を置いてその上にペンを置いた。するとハウリンの神姫がそれを持ち、出欠の確認と同時に出席簿に記入していく

「はい。それじゃ改めて、私が今日からみんなの担任を務める永山早苗です。もう判つてるかもしれないけど私はじ覽の通り、目が見えなくてみんなには、迷惑を掛けた事もあるかもしれないけどよしぐれ。そしてこの子は私のパートナーのリッキイよ」

「リッキイです。早苗さんの田の代わりをしており、授業でも補助を務めますのでヨロシクお願いします」

とても礼儀正しい性格設定らしく、リツキイは自分のお腹の部分で手を重ね深々と礼をした

「では、みなさん。これから一年間、一緒に頑張りましょうね」

その後は定番の自己紹介とパートナー・神姫の紹介、その後にここでの授業や行事についての簡単な説明が入り、午前のみで神姫学院の初日は終わりを迎えた

第2話『授業開始、バトルの種類とリアルファイトの恐怖』

そして、本格的な授業が幕を開ける一日目。神妃学院では2日目から既に神姫バトル関係の授業が行われる事となり、普通の授業は眠ってしまいがちだった生徒もこの授業になつたとたんパツチリと目を覚ましている。そして何故か、第一回目の授業はグラウンドで行われる事となつた

「とはいって、教本を見た限り、最初は3つの神姫バトルの種類についての説明らしいな」

「何よそれ？ そんなのみんな知っているじゃない？」

「まあ、そう言つなつて。中にはまだマスターになつたばかりの奴だつて居るかもしれない。そうした生徒の為に基礎の部分から授業をしていくんじゃないか？」

「……基礎は大事」

予習で軽く読んでみた教本の最初のページを思い出しながら拓哉が呟くと千歳が不満そうに声を上げて甚平と遙がそれをなだめいた。丁度、その時

「みんな並んで。授業を始めるよ」

ぱつちり開かれた目に丸いふち無しの眼鏡を掛け、こげ茶色のショートヘアをした少し小太りな男性がマーメイド型神姫、イーアネイラと共に入ってきた。両手で少し大きめなダンボールとそれより小さなダンボールを持っている

「さて、僕がこのクラスの神姫関係の授業を受け持つ、新渡戸総一です。そしてこちらが、授業の補佐をしてくれるセイラさん

「イーアネイラのセイラです。これから一年間、マスターと一緒に君達をビシバシ鍛えていきますから、頑張つて付いてきて下さい

「さて、それじゃあ最初はいま現在武装神姫の世界で行われている。3つのバトルの種類について説明しようか」

総一とセイラがリアルバトル、バーチャルバトル、ライドオンバトルの3つについて説明を始める。が、最初の基礎の部分は知っている生徒も多い為、全員がまじめに聞いている訳では無い。まあ、そこは判っているのか総一も寝てる奴が居ない限りは特に何も言わない、が

「ウエーブ」

が、セイラの方は容赦無し。明らかに話を聞いていない奴を見つければ、空中移動の機能が付いたリアパーソンを装備して遠慮なく拳骨を落とす。しかも水中用だけあってそのパワーもすごいらしく、拳骨を受けた生徒は両手で頭を抑えている。

「まあ、どんなバトルかは話には聞いた事ある人も居るからね。口での説明はこれぐらいにして、今日は実際に皆にはリアルバトルを経験してもらおうかな」

総一の言葉に生徒達がざわめきだす。それもそうだ、何せリアルバトルと言つのは他の二つの様にバーチャルリアティで再現された神姫を戦わすのではなく、神姫本体によるガチバトル。当然、武装の破損や神姫自体が故障したりする恐れがある。その為、その恐怖と緊張感がいいと、スリルを求めるマスターも神姫で無い限り、普通なら決してやらないバトルだ

「はい、静かに。別に君達のパートナーでバトルをしてとは言わないよ。まあ、自分の神姫でバトルしても良いというならそれでもいいけど、それ以外の生徒達の為にちゃんと用意はしてあるから」

そう言つて、総一はさつきのダンボールを開けて何かを取り出す

「なるほど、ネイキッドを使ってバトルする訳か

「……ネイキッド？」

「あれも神姫……なのか？」

遙と拓哉が疑問に思つとおり、総一の取り出した物は髪や目、口も無いマネキンを小さくしたみたいなモノで体形から辛うじて女性だと判る程度、が、武装を装備したものだった。そしてそれに答えたのは千歳とアーシア

「厳密には違うわね。あれには人格も心も無く、バトルに必要なプログラムだけが入力されている。いわばバトル専用の神姫って所ね」

「だから、マスター登録無しで誰でも使えるからこいつした授業とかでも良く使われるんだよ」

「自分の神姫でリアルバトルしたくないって生徒や自分の神姫が居ないって生徒はこのネイキッドを貸し出すから、各自取りに来る様に。自分の神姫でバトルをするつて生徒はこっちのダンボールに武装が入つているから自分の神姫に装備させて置いて」

その言葉をきつかけに殆どの生徒がネイキッドを借りに来る。当然ながら拓哉達も今回はネイキッドを使つ事にした

「みんな準備は出来たかな？ それじゃあ最初は 」

そして、総一が二人の生徒を呼んで早速バトルを開始させた

「アーシアは直接バトルに挑むのか？」

しかし中には数人程、自分のパートナーでバトルをしようとしている生徒と神姫も居るらしく、千歳とアーシアもその一組だ。レイナが思わず声を掛けると

「当然よ！ こんなんで臆していたらプロなんか目指せないわ！」

「で、ですけど、もしアーシアさんの身に何かあつたら……」

「そんなに心配しなくとも大丈夫だつて、セフィ！ それに日本の神姫を目指すなら、どんなバトルでも逃げない！ それぐらい心意気がなきやね！」

一人してやる気になつており、アーシアも防具武器共に借りてきた汎用武装を装備している

「と、二人して息巻いていたのが約12分ほど前……どんなバトルでも逃げないんじゃなかつたのか？」

あれから更に5組の生徒がリアルバトルを終えた所で、自分の神姫を使ってバトルをしようだなんて考えてた生徒は居なくなり、彼らもネイキッドを借りてきている。拓哉が千歳に声を掛けると千歳は物凄い剣幕で拓哉の方を振り返り

「あんなの見せられたら逃げたくなるわよつ！ 武装が木つ端微塵になるだけならまだしも、ネイキッドの腕や足はもげるわ！ 頭部は吹つ飛ぶわ！ 極めつけはコア部分（神姫の中核でCSCをセツトする場所）にぽつかり穴が開いたと思ったら「あー、これはもう修理できないね」よ！ アーシアをあんな目に遭わせるなんて冗談じやないわよつ！…」

無論、千歳もその手にネイキッドを持つており、アーシアの方も少し前の自分の無謀さに涙目＋ガクブル状態になつていた。そして甚平は得心が行つたとばかりに

「なるほどな……基礎の復習とかじやなくて、恐らくこれが今日の講義のホントの目的だな。やつた事も無いくせにリアルバトルを甘

く見ている生徒に実際に体験して貰つて、その恐ろしさを知つてもらおうつて所だな」

「でしううね……あー、嫌な汗搔いたわよ。もう……」

「私も……もし私が人間だったら、絶対しばらく夢に見そつです……」

こうして、約数名とその神姫がげんなりした状態で、第一回目の神姫バトルの授業は幕を閉じた

第3話『良き神姫とは』

授業が終わった後は殆どの生徒は部活に精を出すのが「」く一般的。けれども、この時期は部活の勧誘もまだ始まっていない為、新入生は放課後は各自の時間を過ごす。中には既に次の大学受験に向けて予習も兼ねた猛勉強を始める者も居るだろうが、大学部へのエスカラーター式の神妃学院にはそうした生徒は殆ど居ない。皆が昔からの友達や高等部で会ったクラスメートと街に遊びへと繰り出す。そして、神妃学院の生徒が放課後遊ぶ場所と言えば概ね決まっている

相手のハウリン型が投擲武器を5つ扇状に投げてくるのをセフィは手に持ったアルヴォP D W 11エクステンドとG E モデル L S 9 レーザーソードで弾く。そして今度はアルヴォの銃撃を相手に撃ち込み、続けてビット兵器のココレットを飛ばし

『セフィ、一気に突っ込むぞ！』

「はいっ！」

そして同時に自身も相手との距離を詰める。ココレットからの攻撃を避けるのに一杯一杯になっている内に相手を間合いに捉え、アルヴォの斬撃のラッシュを浴びせる。そして

「これで終わりです！」

最後にレーザーソードを両手持ちにして袈裟斬りに振り下ろすと、相手は後ろに倒れ、動かなくなる

「やりましたね！ マスター、勝ちましたよー！」

「ああ、お疲れセフイ」

「だああ——！ 負けたつス！」

試合終了が終了し筐体のステージから出てきたセフイに拓哉が労いの言葉をかけると同時に相手の青年が手の平に相棒のハウリンを乗せてやってくる

「この間までは俺らの方が上だったのに、強くなつたつスね。拓哉とセフイ」

「あらがとうござこます」

「まあ、漸く自分達なりの戦い方が見えてきた所だからな」

相手の青年は拓哉が神妃市に引っ越してきてから何度かバトルをしており今ではすっかり顔なじみとなつていて。その頃はまだ黒星の方が多かつた拓哉とセフイだが次第に、自分達のスタイルを固めてきた。前のロザリーのアドバイスに則り、セフイは機動力を損なわぬ様に武装を3つまでにする事にした。となると大事なのは武装の組み合わせ。そこで二人が目を付けたのがアルヴォに特殊アタッチメントを取り付け、ライフルブレード ライフルブレードとなつたアルヴォ P D W 1 1 エクステンドだ。遠距離、近距離両方に対応出来るこの武装を主軸に拓哉とセフイは戦い方を組み立てる事にした

「なるほどつスね。でも、ライバルが強くなつてくる方が俺も燃えるつス！」

「おう！ その意気だぜマスター！ あたしらがもつと強くなつた

「はー、勿論です！」

「はー、勿論です！」

「いつでも大歓迎だ」

握手を交わし、相手が他の対戦相手を探しにいった所で、長椅子に座りながら一人のバトルを観戦していた甚平が「おつかれさん」と良いながら傍にやつてくれる

「「「」」最近、拓哉とセフイも絶好調だな

「せつちゅーじーです」

「あの……たま子さん、せつちゅーじーひじやなくて絶好調、です」

セフイとたま子が話をしている所で拓哉と甚平はターミナルの方で今日戦つた分の神姫ポイントを加算させる

「バトルにも慣れてきたみたいだしそろそろ純正武装だけじゃなくて汎用武装の方も使ってみたらどうだ？」

甚平の言葉に拓哉は少し考える。確かに今までずっと、神姫祭りで貰った純正武装しか使っていない。

「遙ちゃんだって、もう使っているしな

そう言つて、ゆび指した筐体では遙とレイナが千歳、アーシアと組んでタッグバトルをしている。相手の神姫が振り下ろされたハンマーをグリーヴァで受け止める。グリーヴァの刀身とハンマーの柄

の部分で鍔迫り合いとなつていたが、レイナは相手のハンマーの先端を副腕で掴むと、相手ごと宙へと投げ飛ばす。と、同時に空中で戦っていたアーシアも相手を蹴り飛ばし、相手のコンビを一箇所に纏める。その瞬間

『……レイナ』

「ああっ！」

グリーヴァを仕舞うと両手にジー・ラヴ・ズルイフと機関銃、副腕の片方にレーザーランチャー、腰には多弾頭ミサイル、加えてローカのガトリング。計5つの武装の銃口を相手タッグに向ける

『「フルバースト！（……）」』

そして、全武装の一斉射。無数の弾丸にレーザー、大量のミサイルが空中に居た一体に全弾叩き込まれ、相手はそのまま地面に落下、折り重なつた状態で目を回している

『勝つた……』

遥が静かに宣言し、そこで試合終了。ストラーフは元々は近距離パワーファイターだが遙とレイナはあえてそれに反した戦法をとつた。副腕も含めた4つの腕もフルに活かし、色々な銃火器の組み合わせで攻撃を仕掛ける。無論、接近戦対策も考慮しロークの剣先とグリーヴァによる一刀流を使うがこちらは迎撃程度だ。4つの銃火器とグリーヴァの計5つ、スピードを犠牲にした遠距離パワーファイトがレイナと遙のバトルスタイルだ。バイザーを外し、遙と千歳がハイタッチ。アーシアとレイナも互いの拳をコン、とぶつける

「なつ？」

「そう、だな」

甚平の言つとおり、折角なんだから武器ぐらいは純正に拘らず自分が持つていなきカテゴリーの武装をそろえてみるのも悪くないかもしねえ。考へが纏まつた所で、一人がこちらに戻つてくる

「よつ、おつかれさん」

そこで、遙と千歳達も一人に会流する

うん……お疲れ

いやー、遙とレイナのあの攻撃は何時見てもスカッとするわね！」

たよね、なんと言おうか、こう……全弾持つでけー！ さて感じで、

「最初は戸惑った。けれど、慣れてくるにつれて病み付きになつて来た」

レイナが指で拳銃の形を作り撃つまねをしていると、千歳が拓哉と甚平の肩に腕を回し

「で、男一人で一体なんの相談をしていたのかしら？」
していい限り、女には聞かせられない話かしら？」
神姫も参加

「ちげーよ、それそろ拓哉も武装を買つた方がいいんじゃないかって話」

「一人の顔を交互に見ながら問い合わせ、甚平が答えると、千歳は一瞬だけキヨトンとしたかと思つと「フム」と一人から離れて

「それもそうね。拓哉とセフイは確か高機動近接戦がメインだったわね。だったらシヨットガンか機動型の天敵、ホーミングミサイルの迎撃用に機関銃ぐらい持つておくべきかもね」

「浮遊機雷で相手の逃げ道を封じるのも効果的……」

と、今までの拓哉の戦闘から自分の意見を述べる千歳と遙

「まあ、とりあえずオフィシャルショップだな。おーい行くぞ、お前ら！」

話も纏まつた所で、甚平が長椅子の上で談笑していたセフイ達に声をかけ拓哉達はゲーセンを後に神姫センターを訪れる。オフィシャルショップに辿り着けば各自で武装の品定めを開始し、拓哉も機関銃や浮遊機雷の武装を手に持ちながら眺めている

「なるほど、色々な武装があるんですね。私も色々な武装を扱える様に頑張らなきや」

拓哉の肩の上からセフイも棚に並んだ色々な武装を見渡していた。が、ふと見覚えのある人物を見つけた

「えーっと、確かこつちは銃器の棚だったはずだけど……あら、何だか棚の配置が変わってる？」

そこに居たのは自分達の担任である早苗、が、何時もは目の代わりに傍に居る筈のリツキイの姿は何故か無い。彼女は何かの商品ス

ペースを手探りで探していったが床に積んであるダンボールに近づいていく

「あ、あのー、そのまま行くと通路に積んであるダンボールの上に、ぶつかっちゃいますよー。」

セフィイの声に拓哉も漸く先生に気づく

「え、そりなの？ どうもありがとうございますー。おかげで箱の下敷きにならずに済んだわ……その声はアーンヴァル型の神姫かしら？」

「早苗先生」

「その頃……もしかしてクラスの天音拓哉君かしら？」

「はー、そりです。あの先生、リツキイの方は何処に？」

「早苗さん、神姫のクリーニング終わりましたよー！」

拓哉がリツキイが見当たらない事を訊ねると同時にカウンターの方から野乃香の声が聞こえ、早苗は慣れたオフィシャルショップ自体は慣れた場所らしく、スムーズにレジに向かうとリツキイと会流し戻つてくる

「拓哉さん、セフィイさん。先ほどは早苗さんを助けていただいてありがとうございました。普段は私は、障害物にぶつかったりしない様に気をつけているんですけど……早苗さん、私が居ない時もふらふら歩き回っちゃうから」

「だつて、きれいになつて出てきたリツキイに新しい武装をプレゼ

ントして、驚かせようと思つたんだもの」

「もひ、早苗さんつたら……私にはそんな事より、早苗さんが無事で居てくれる事のほうが大事なんですつて、何度言えば」

「はいはい、判つてますつて。でも、武装は買いましょうね」

「私はバトルなんてしないから武装なんて良いんですよ」

「じゃあ、アクセサリーでもいいわ。何か買つてあげたいのよ、何時も私の臣になつてくれてる御礼にね」

「私は、早苗さんと一緒に居られるだけで……」

流石は神妃学院の教師。神姫との関係もとても良いもので教師だけではなく、神姫マスターとしても生徒達の模範となりえる人の様だ

（自分もセフイとそう言つ関係になれるだらつか？）

一人の様子を眺めていた拓哉はそんな事を考えていたがその途中で

（いや、なれるか？ ならないといけない、だな）

自分の親はそれだけの決意があるかどうか試す為にあの条件を出したのだ。ならばこれからもそれに応え続けないといけないのだ

「ええ、私よ……でも、そういう気持ちを形にしておくのも、悪くないと思うの。が、いいからアクセサリー売り場に連れてつて」

「早苗さんがそこまで言つなら……」

「それじゃ、拓哉君、セフイちゃん、また明日学校でね。それと、神姫バトルもいいけど、勉強もしつかりね？ 神姫推奨と言つても高校が勉強の場である事は変わりないのでから」

と、最後に教師らしい言葉を残して「一人はアクセ売り場の方へ歩いていく

「田の見えないマスターの『田』になつてゐる、か……そんな風に役立つてゐる神姫も居るんですね」

一人のやり取りを聞いて、思つところがあつたのはセフイも同じらしく一人の後姿を眺めながら呟く

「私も、戦つて強くなるだけじゃ、いい神姫とは言えないかもですね……」

「セフイ？」

やがて、何かを決意した様に頷く。その様子に拓哉が疑問の声を投げかけるとセフイは「何でも無いです」と首を振つて

「兎に角、今は武装を見て回つましょー！」

そう言つて、拓哉とセフイは再び、武装に田を向ける

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1195z/>

武装神姫《BATTLE CHRONICLE》

2011年12月31日23時48分発行